
リリカルなのは for FFXI

黒狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは for FFXI

【Nコード】

N0883X

【作者名】

黒狐

【あらすじ】

処女作でございます。

本作品はなのは×MMOFFXIのクロスオーバーとなります。

おそらくは管理局アンチというよりものはサイドアンチになる可能性がありますが、よろしければ後は移動のことよろしく願い申し上げます。

あと、感想をいただけると更新の励みになりますのでできましたらよろしくお願い申し上げます。

一つ、お願いがございます。

この作品は作者の妄想を膨らませ、イレギュラーを混ぜた「i f」でございます。

結果として、不当な扱いに見える可能性も否めなくアンチ職も強くなるのが予想されます。

高町家やなのは、管理局に関してアンチなどが我慢できない方がいらっしましたら『戻る』を選択してください。お願いします。

転生と始まり（前書き）

何かと拙いとは思いますが良ければおつきあいください。

転生と始まり

平凡な世界に転生した。

当初、彼はそう考えていた。

仕事について3、4年たってから倒れそれから病院暮らしでなかなか外に出ることができず、知識は豊富でゲームにはまり込んでいた彼は、あるはずがないと思いつつも現実をそう受け止めた。

尤も、技術系統は違えど、多くの武具や知識、様々な素材と共に現れたモーグリと名乗る幻獣が訪れたあたりで平凡から大きく遠のく事になる。

「なんだか知らないけどご主人様と呼ばれて飛び出てじゃじゃじゃじゃ〜クポ！」

じゃじゃじゃじゃ〜クポじゃないだろう。

思わずつつこんでしまった彼は決して悪くないだろうと思う。

が、その反面、心強いモノでもあった。

彼は確かに転生をして、『此处』いる。が、それを証明するモノはない。

本当に生前の『彼』としての経験があったのか、あれだけの思いをしてすり込まれた経験は本当に身に付いているのか？

転生当初、彼という存在を自覚した彼がぶち当たった壁と言っても良いだろう。

そこに現れた、なじみの深い謎生物は彼の心に一定の安定性を生み出す事に成功したと言える。

「説明をするクポ！あと、モグハウス協会にご主人様宛の手紙が届いているクポ」

クポクポ言いながらの説明、いや、ありがたいのだがご都合主義を感じざるを得ない。

しかも、手紙って何だ？

彼は、本来、リアリストである。

情報を集め、手札をそろえて状況を進めるタイプといえるのだが、それが整わず流されるのは少々おもしろくない。

とはいえ、情報は欲しいので説明と手紙に意識を集中させると間もなく噴いた。

それはもう盛大に。

なぜなら、いや、まずは情報を整理してあげていこう。

1つに習得していた全てのジョブアビリティ、魔法は使用可能。

2つに上記の制限となるが全てのジョブの活用は出来ず、メインジョブ・サポートジョブに二つのジョブを選択しはめるというモノ。

3つに預けていた装備を含め全てのアイテムの使用が可能。

4つに育てたスキルは問題なく適用される。これは合成も変わらずメインキャラ問わず最高値が自身に適用されている事になる。

この時点で思わず「どんなチートだ」と呟いた彼の心情はいかほど名ものかは分かりかねるが、まあ、大凡間違っではないだろう。続いて、手紙の内容だが、こちらは驚きを隠せなかった。

【小さき者よ、汝の与えた死に感謝の意を示す。此度の生を楽しむが良い】

【優しき者よ、汝の与えた救に感謝の意を示す。此度の生を謳歌する事を願う】

これだけならば、訳の分からない手紙で終わるのだがそれを許さないもサインが入っている。

プロマシアとアルタナ、一文だ。

生前の彼が最も好んだゲーム、ファイナルファンタジーXIIの神と呼ばれていた者たちからの手紙、もう、何がなんだかわからなくなりそうになりながらも状況を受け入れ、説明をモーグリから受ける。

これで終わりかと思った矢先、考えられないような痛みが彼を襲った。

思わずあげてしまった悲鳴に父親が駆け付け、病院にすぐに搬送され、入院となったがそれどころではない。

意識を失い、夢とも現実ともつかない空間でFFXIで作られたキャラたちの経験を体に刻み込まれる。

どれほどの苦痛か、など言い表せれるはずもない。

だが、少年はその苦痛に安堵感を覚えていた。

少年ためにいうなら彼がMだからとかではなく、彼が生きていたという証明を受け取ることができたからに他ならない。

そうして、彼は誕生した。

接触！高町家！！

最初は、普通の人生だと思っていた。

何の因果かは分からず仕舞いだっただが、モーグリという使い魔と
いうかペットができて、不思議な力や技術が身についた『だけ』だ
と置いていた。

確かに地獄じみた経験をさせられたが手にしてみれば、それ以上
の価値のあるものだとわかる。

尤も、小学生1年の身でそんなことが起きてもどうしようもない
のだが、ありがたいことに我が家は父子家庭だ。

この体になってからの記憶をたどると4歳ぐらいの時に母親のほ
うが浮気をして発覚、まあ、子供ができた、と言っても父親と子づ
くりもろくすこしないで出来るわけではないし、そもそも、父と母で
はできない血液型だったというから救えない。

そんなこんなで俺には母親がいない。

前世で散々迷惑をかけられた両親は兎も角、忙しいのにもかかわ
らず細かな時間を見つけてはかまってくれる父親には感謝をしても
到底足りぬものではない。

幸にも不幸にも父親がいないため、モーグリの存在を隠すのには
苦労しなかったし、なんとあのなぞ生物、一日バナナ一本程度で十
分らしい。

まして、父親が部屋に入っても隠れてくれるというからありがた
いことこの上ない。

そんな、使い魔？にも恵まれ新たな人生をやり直せるのはこの上
ない幸せなのだろう。

さしあたって、今の目標とするなら、前世の願いである結婚して
幸せな老後を目指しつつ、父性愛を注いでくれる父親と類稀なる忠
誠というか愛情？を注いでくれるモーグリに報いいること。である。
しかし、だ。

懸念があつた。

それも、核地雷級のものだ。

名前が海鳴市という、この土地で入る小学校は風芽丘小学校……
悩んだ。

成績では聖祥も全く問題ないと言う幼稚園の先生と強く勧める父親に頭を下げ風芽丘小学校へと「友達と離れたくない」とウソ泣きまでして入学した。

なぜか？

簡単な理由だ。

仮にこれがとら八だった場合で、尚且つ登場キャラクターのいずれかに該当したとしても友好がなければ問題ない。

少なくとも進んで友好を温める主人公ではないし、主人公でなければなあなあで充分対処できる。

だが、『なのは』は違う。

ぶつかり合いながらも絆を深め、どんなことがあっても相手を許す懐の深さを持つ少女。と彼女を評価できる。

裏側としてみてしまえば、何が何でも自分の意見を貫き通すエゴイストと判断しても何らおかしくはない。

それ故に不味いのだ。

彼女はどんなことがあっても『友達』という関係を作りたがる。だけなら良い。

前者と同じく適当な関係を継続できればいい、どうせ中等部なれば離れれるのだ。

だが、FFのジョブには『MP』が存在する。

検証は不可能なのだがこれがリンカーコアとなる場合、A・Sで間違いなく狙われることになり、無印であつてもユーノの念話や感知能力により有耶無耶のうちに関わりを持たされることになるのだ。しかも、拒否をすればただけ強く食いつく……どんな罰ゲームかと言いたくもなるのだが、拒否云々の前にそんな状況を作らせなければいいのだ。

頼み辛い条件の相手となることでユーノの交渉を跳ね除け、なのはのすっぱん並みの食いつきから逃げる。

条件を整えるには聖翔などよりも風芽丘のほうが遥かに優れているのだ！

フハハハハッ！

今度こそ、人生をエンジョイさせてもらおう、条件はクリアーだ！

……そう思っていた時が私にもありました。

ネタじゃないのに本当にそういうなんて思わなかった。

だってさ…。

同級生と一緒にいたくない戦闘生命体と6年一緒だぜ？

信じられるか？

6クラスあるのにずっと一緒だぞ？

中学は言っても一緒にいて呪いか？呪詛状態か？

虐めか？虐めなのか？

そんな呟きを漏らしても罰は当たるまい。

許可が下りるのであれば一日中愚痴を呟ける自信が俺にはある。

さて、今回割り振られた案件は今までで一番ヘヴィなものだ。

このミッションは、こちらの最重要対象 Takamati N
anoha がもつともPOPしやすいエリアであるTakama
ti homeに行かなくてはならない。

何せ、あの化け物はトリガーも何もなしにPOPする上に、ヘイトリストに載ったら最後、ほかのエリアにいたとしても勝手に沸いて出てくるトンでも仕様だ。

あんな化け物作った運営がいるとするなら小一時間問い詰めなければならぬのは、決定的に明らかで、如何に力カツとバックステツポしても無理だろう。

「さて、信濃。そろそろ現実に戻ってこのプリントを届けてくれ」
あまりのシヨックに現実逃避していた俺に、クエストの発注者である織部 忠一教諭（34）見合い失敗回数更新中。が声をかけてきた。

ああ、信濃と言うのは俺の名字である。

信濃 信志、これが俺の今回の名前であるのだが、今回は置いておく。

そしてこの、プリントの配達を不幸にも承る原因というのが、あの魔王の城が非常に残念なことに近所なのだ。

「あんな信濃、お前がなんでそんなに高町と接触したくないかは知らん。現に小学校でも相当、手を焼いたと連絡を受けている」

ほほう、まあ、相談などは尤もなので何も言い返す気はしない、仮に避ける理由を言っても頭のおかしい電波君にされる。それは回避したい。

「いじめはない、これは、起きないようにお前自身が気を使っていたのも知っている。だがな、協調性というのは必要以上に大切なものなのだ」

おお、織部が教師っぽいことを言っている！

なぜ、見合い現場になるとドモって何も言えなくなるのだろうか？ 非常にもつたいない気がするが…。

「じゃかしい！ ったく、いいか？ 何があつたか知らないし、聞かん、がもう少し打ち解ける」

思考が発言となつて漏れていたらしい、突っ込みを受け反省はするが後悔はしない。

が、入学して2か月でこうも動かれるということは別のアクションがすでにあつたためと考えておかしくない。とみるべきか？

例えば、相手のほうから相談を受けた。ないし、受けているのを知っている。いや、それにしても動き方が若干強硬すぎると思うのだが？

なら、続く場合、何らかのアクションを起こさざるを得ないところ

るまで来ているため、今回の件を利用して強硬的にでも解決しようとしている。とか？」

「途中から、声に出していたが、その通りだよ」

「おや、図星と白状とは面白い…が、その答えは面白くありませんね、先生」

思考をまとめるうえでよくやる癖ではあるのだが声に出していたあたり、何とも痛い思考の持ち主と思われかねないので自重したいのだが、織部の回答はそれを許してくれそうにもなかった。

「面白く答える必要はない、必要なのは現実に対応する柔軟性だ」「だからって、それ中学一年に言うセリフですか？」

「妙なところで頭のまわる生徒だと理解している。これも柔軟性だ、信濃」

いいから行って来いとプリントの束を渡されて、職員室から追い出される。

行きたくはないが行かざるを得ず、ポストに入れるなども考えたが受け取りが確認できない、または、手渡しをしない場合、本格的な保護者の介入も予想される。

信志は歩きながら今後のことに関しての思考を巡らせ、状況を把握していくことにした。

現在の状況は、教師の手元に問題が残されているだけだ。

しかし、これは一時的なものとして判断されているため、と、今回の件で認識を改めざるを得ない。

なぜ、こんな状況になったか？分かりきっている。

俺が『高町』に対する接触を拒んだからに他ならない。

説明すると挨拶はするがその程度の友人、最高の状態で知人を目指していたが程無くして状況は大きく変わった。変わらざるを得なかった。

高町家が近くにあったためだ。

これは大変危険である。

HNMである『Takamati NANOHA』や『Takamati NANOHA』

matikyouya』、『Takamati Shiro』
に遭遇する可能性がぐつと高くなる。

まして、親が滅多にいないと知られた場合、劇中から考え接触を図ろうとしてくる可能性が極めて高い。

そして、我が親父殿はその接触をした場合、彼らの提案を受けてしまう可能性が極めて高くなる。

とらハかなのはか図りかねているこの現状で、彼らとの接触は何としても避けたい。

今は、分岐点なのだ。

このレポートを渡される原因となった高町美由希の欠席の理由は父親の怪我というもの。つまり、高町士郎は死んでいない。

残念ながら、とらハで彼がすぐに死んだのか、病院で死んだのか分からない。これは、俺の記憶があいまいになっているからだ。

さすがに万能人間である自信は無いし、そこまで優秀という自信はない。

高町美由希にかかわるのはこの件が終わってからにしようと決めていた俺にとつては、都合の悪い話以外の何物でもない。

だが、強制的な接触を図られるならこちらにある程度手綱を握れていたほうがいいには違いない。

「だからとて、喜び勇んで逝きたいくはないな」

因みに、逝きたいは誤字に非ず。目の前にそびえる地獄門を潜らねば高町家に入ることはかなわない。

ぼそりと呟いたセリフはいつの間にか降り始めた雨にかき消され、余計に気を重くさせられながら門徒を叩いた。

しかし、叩いた後でトンデモナイことに気が付いた。

いま、この高町家にいるのはHNMの中でももっとも凶悪な『Takamati Nanno ha』の可能性が極めて高いことに気が付いたのだ。

これがなのはだったら、死亡フラグになりかねないんじゃないのか？

そう思ったが吉日と、翠屋のほうへ出直そうとした瞬間、地獄の門は開いた。

「おかえり！」

そこにいたのは栗色の髪をサイドテールに結んだ少女。

間違いなく『Takamati Nanhah』だ。

これが『なのは』であった場合、時間がたてばHNMに成長するらしい。

18人PTとかでも普通に殲滅できそうなHNMだ、いつそリンクシュルでも作って可能な限りの殲滅戦で倒すことが可能なのか検討に移ったあたりで、目の前の少女がこちらを覗き込んでいた。

「あの…？」

なんと言つか、覚悟を決めるしかない。

あとは、以下に交渉をうまく行い、逃げるかだ。

魔王の卵

一人で家に帰ってお母さんが作ってくれたおやつを食べる。
急に暗くなってきた。雨が降ってきた。

怖くて、寂しくて、心細くて、泣きそうになって受話器に伸びかけたのを終わって戻した。

私は、良い子だから――

そう、高町なのは良い子でなくてはならない――
じゃないと、だれも私に声をかけてくれなくなる。

きつと、お母さんは笑顔を見せてくれなくなる。

きつと、お姉ちゃんはお話をしてくれなくなる。

きつと、お兄ちゃんはお話をしてくれなくなる。

それは、とても怖いことだ。

それは、とても悲しいことだ。

それは、とても寂しいことだ。

だから、高町なのは良い子でなければならない――

良い子じゃなければ、私にだれも見えないなくなる。

友達と言った。

ナノハちゃんは優しいね。

そうすると、友達のお母さんは言った。

ナノハちゃんは良い子だからよ。と、確かにそうだった。

みんな、私を良い子だから誉めてくれた。

なのはは、ナノハちゃんが良い子でなければならない。

じゃないと、みんなは消えていなくなる。

膝を抱え、恐怖心と戦う。

そんな中、戸をたたく音が聞こえた。

雨の中、誰か帰ってきてくれたのだろうか？

もしかしたら、雨で私が寂しがってないか誰か来てくれたのかも
しれない。

良い子にしていたご褒美かもしれない。

そう思つて、私が明けた戸の先にいたのは見たことのない、制服を着たお姉ちゃんと同じぐらいの男の人でした。

「あゝ、そうだよ、そうなんだよ。なんで、俺はこんなことに頭が回らないかね」

私を見るなり頭を抱えた男の人みて、私はサーッと血の気が引いていくのがわかった。

私がしたのは家族を迎える為のあいさつ。

でも、彼は来客、なら、私が言うべきなのは「おかえり」ではなく「いらつしゃいませ」

ではないだろうか？

まずい、私は彼に悪い子と思われてしまう。

そうしたら、彼は私から去って行つてしまう。

また、独りぼつちになつて一人で遅くまで待たなければならない。

そんなのは、とても嫌だ――

「ご、ごめんなさつ…ごめんなさい！」

堪らず、私は彼のズボンの裾をつかんで謝り泣いていた。

謝りだすと堰を切つたように涙が出てきて嗚咽が止まらない。

「おわつ！？なんだ！？落ち着け！」

男の人が驚く様に叫んで後退りしようとしたのがわかり、余計に鳴き声を強く上げてしまった。

「ごめんなさい！行かないで！一人にしないで！」

そう、叫んだ私を少し間をおいてから男の人が初めて優しくなでてくれた。

それでも僕はやってない――

なんてセリフを言つても許されると俺は思う。

もつともそれは、この場にいる俺を含めた二人が10年位たたないと意味の分からないものとなり果てるだろうが。

ああ、一部の特殊な趣味の方々にはあり得るのかもしれないが、戦闘民族高町に知られた場合、リアルに首が飛びかねない。と、条件を付ける。

見方によれば彼女に別れ話を切り出して、彼氏に縋る彼女の図なのだが、如何せん、幼すぎる。などと考えていると幼女が震えながら叫んだ。『一人にしないで』と。控えめに見てもこの家は大きい。そんな家に、一人で待つ彼女の心は如何様なものだったのだろうか？フラッシュバックするように病室で伽藍洞になった空間に一人まつ、前の自分がよぎった。負担になりそうだからと言われ、せっかく来た友人知人が面会を早めに切り上げられない様に必死になつて場を盛り上げ我慢した。夜は死の恐怖におびえて過ごした。昼は人はいたが付きつ切りという訳はなく人が恋しくて仕方がなかった。だからなのかもしれない。

そつと、幼女を撫でた。踏み込むのが危険とはわかっているが、この状況で彼女を見捨てたら、きつとはとげが残る。笑つても笑えない、許しても許せない日が来る。

なにより、自分に被った人間を見捨てる。そんなことをしたら自信が許せないだろう。

幸いにして、今は幼少期。
手の打ち様もあるだろう。

楽観的とは言うなかれ、うまくいけば場は収まり、学校に上がっていた相談は取り下げられる。逆を言えば、このまま帰れば禍根が残る。それだけは絶対に避けたい。

あー、そこ、腹黒つて言うなよ？
どう見てもよろしくない混乱の仕方をしている魔王の卵に対し、コミュニケーションを試みる。

思い出せ、基本的な対人交渉は一通り学んだはずだ。

前世の学習を無駄にするな、俺！

たしか、目線を合わせるのが基本だったか？

しゃがみこんで泣きじゃくる魔王の卵に視線を合わせて、頭を撫

でる。

出来ることならば、とんずらを使って逃げてみたい誘惑に駆られるがそこは我慢。

なぜなら、これを納めない時点で此処の住人に気が付かれた場合、良い未来は微塵に想像できないからだ。

「はじめまして、信濃信志といいます。高町美由希さんはご在宅ですか？」

わかりきってるあたり、聞いてみるのは外道の極みということな
かれ、少なくとも確認は大事、いなければプリントを渡して俺は帰
る！そして、モーグリとプリンを食べるんだ！

Oh・my god！

いや、最後の思考が不味いのは知っていたよ？うん、本当に。

えーっ…と、現在、私は今、噂のHNMの巣である『Takama
ati home』にいます。

本当に広く、道場からは今にもPOPしそうな雰囲気が漂い、で
きることならデジョンでもして家に帰りたいという気持ちを抑える
のが精いっぱいです。

などと、アナウンサー風に報告してみるが状況など変わるわけも
ない。ちくせう…。

目の前にあるのは明らかに彼女の為にとっておかれたと見られる
ケーチが鎮座しており、ぶかぶかのエプロンを占めた魔王の卵…め
んどうなのでは通すが、冷たいお茶をグラスに注いでもって
きた。

まあ、なんだ。

びつくりするぐらい緊張してる。

俺もなんだが、なのはがだ。しかも、これはいい意味の緊張では
なく新人とかがミスをやらかす時に必ずやる緊張、つまりはだ。

『自分は失敗してはいけない』

と、言うもの。下らない、実に下らない。

ミス一つなんだというのだ？しない人間などいない、程よく注意し、たとえミスをしても補えばいい。

絶対にミスをできないというなら、しない状況にもっていくのが当然なのである。

見てるこっちがハラハラさせながらお茶をテーブルに置くとジーッとしてこっちも見てくる。食べさせる気があるのだろうか？

そんなことを考えたとき、小さく腹の虫が泣いた音がした。

無論、俺ではない。序に言うと言の目前にいるのはが恥ずかしさで顔を赤く染め、自分の失態に顔を青くするという、絶対に二つ同時にできそうにないことをやってのけている。

「お茶だけでいいから、ケーキ食べたなら？」

「いえ、大丈夫です！」

一応、進めてみるが断固拒否の構えを崩さない。

非常に面倒で会話もない。

何処のお見合い風景だ？

「で、だ。お姉さんはいつ帰ってくるのかな？」

「あの、その、えっと……」

てっとり早く終わらせて帰る。

これが最善なのだが反応を見る限りまだまだ先になりそうだ。

少なくとも、描写では相当遅くまで放置されていた可能性が高い。どう見ても育児放棄だが、本人はそれに気が付いていないし周りも同様だ。

「じゃあ、ケーキ半分こしないかい？」

「え？」

「いや、甘いもの嫌いじゃないんだけどこれは多すぎて残しそうだから半分食べてくれないかな？」

回りくどい言い方だが、やむ得ない。

呆けた顔でこちら絵おみているなのはに声をかけ、ケーキを半分

に割ってなのは前に差し出すと嬉しそうに半分のケーキを食べ始めた。

しかし、だ。

姉は帰ってこない。

何時ごろ帰ってくるかなど全く知らないが、おそらく深夜帯と考えていいのではないだろうか？

軽食やパスタを出すスタイルの喫茶店であれば尚のこと遅くなるだろう。

狙っている客層がどこにあるかわからないが、桃子がなのはと一緒に皿を洗う描写があつたはず、と言う事は6時から8時には帰ってきて家事をしていると考えられる。

あくまで家事をしているだけで食事をしていないことに注目したい。

帰ってきているのは母親のみであつて他の家族もいたがすぐに出かけていた。

これは鍛練と見て取れるが、現在の状況でその鍛練を行っているかは不明。

まして、下手に聞けば警戒されるなどの注目度が上がる危険性もあるため却下となる。

ともなれば、離脱したいのだがお茶がなくなるとすぐにお替わりを注ぐのはが問題となり、雑談をしながら隙を見ては帰ろうとしたが「もう少しだけお待ちください」と足止めをされている為、離脱できない。

どうしてくれよう、この状況。

さらに時間がたち、現在6時。

時間の経過が早いのは何も起きていないからだ。

しかし、ついに動きが出た。

小さく腹の虫が鳴いたのだ！

鳴かせた主は顔を真っ赤にしてうつむいている。

「そろそろご飯の時間だね、申し訳ないけどお暇しようかな？」

ここぞとばかりに帰ろうとすると、目に見えてがっかりするなのは見て罪悪感を感じないわけではないがフラグなどいらない。

「あ、はい、ごめんなさい。お姉ちゃんには伝えておきます」
しょんぼりして答えるなのは、心なしサイドテールが萎れて見える。

ようやく帰れる。そもそも、こう考えること自体がフラグなのかもしれない。

お姉ちゃんの友達は私のお話に相槌をうちながら、いろんなお話をしてくれた。

ところが、楽しい時間はすぐに過ぎるもので6時になるころ、私は致命的な失敗をしていた。1つは晩御飯のことを考えていなかったこと、2つはおやつを分けてしまい空腹に

なるのが早かったこと、3つめはお姉ちゃんは元より、だれもこの家に帰ってくるわけがないのを知っていた。つまり、嘘をついていたこと。

バレルのが怖くて、お兄さんが帰るのが寂しくて、二人でいる時間が終わってほしくなくて必死だった。

私のおなかの音が鳴ると、お兄さんが帰ると言った。

これは当然だ。もう、おやつも残ってないし、私に用意されている晩御飯ではお兄さんはとても足りない。

そんなとき、電話が鳴った。

電話は翠屋から来てるのを知らせている。

私に一縷の望みが出てきた。

お店が早めに空けるとお母さんは、お兄ちゃんを迎えに出してお店で晩御飯を食べさせてくれる。

きつと、そんな我が儘を願った私への罰なのだろうか？

電話の内容は、そんな優しいものではなかった。

「ごめんね、お店忙しくて今日は遅くなるから先に寝ててね」

「あのね、おかあさん、いまね！」

「今、忙しいから帰ったら聞くから『良い子』にしててね？」

短く私の用件を伝える前にお母さんは電話を切ってしまう。折り返し電話を掛けることも出来るのだが、『良い子』でなければ私はならない。そうなると、電話はできない、すればお母さんを困らせてしまうから、でも、と、考えて後ろを見ると険しい表情をしたお兄さんがそこに居た。

「ひっ、ごめんなさい！許してください、嫌いにならないで！良い子にしますから！」

私は気が付いたら叫んで泣きついていた。やめなきゃって思ったのに止まらなくてしがみついているとお兄さんの手が動くのがわかる。

ああ、そうか――

『悪い子』な私はお兄さんから引きはがされる。はがされるだけならいい、叩かれるかもしれない。

でも、しょうがないのだ。

ただ、怖いものは怖い、思わず身を竦めると頭に手を置かれた。

「落ち着け、何か知らんが落ち着け」

お兄さんはゆっくりと口を開くとなのはにそう言ってくれたの。

実際目にしたらトラウマ確定だと思う。(前書き)

少々、短めでございます。

なお、感想などいただけた日には執筆速度が感想1件につき1〜2%のボーナスが付きますのでなにとぞ、なにとぞ！お願いしたいです。

見てる人の生の感想を受け取ってみたい黒狐でした。

実際目にしたらトラウマ確定だと思う。

で……だ。

これはどういった状況だ？

漸く、解放されると思った矢先にかかってきた電話は胸糞悪いものだった。

あれか？

なのははペットか？

なるほど、魔王はこうして作られたのか。

などと考えていると、なのはが抱き着いてきた。まさか、メガンテでも使ってこないだろうな？と内心戦々恐々としてしていると、なのはが必死になって叫んでいた。

なに、この別れ話を切り出したカレカノ状態――

落ち着かせようとなのはを撫でる。

ひたすら撫でる。

落ち着いてきたぐらいで撫でながら状況をまとめつつ今後どう動くかを考える。

これは重要な選択肢と言えるだろう。

間違えれば他の二次創作同様、済崩し的に管理局にばれて働かされるパターンになりかねない。

ただ、何度も言う。

これまでの選択肢ミスで状況は極めて悪い。どうするべきか悩むが、そこまで考えてふと思った。

そこまで気にする必要があるのか？――

確かにフラグの成立は怖い。が、そこまで早急に立つものか？と言っものだ。

積極的な介入を行わず、この子に蝕んでいる『孤独』を取り除けば条件はぐっと軽くなると言える。

行ってみれば、近所のお兄ちゃん的なポジションに立てばあとは

モブと変わらない生活が送れるのだ、試す価値はあるだろう。

ならば、行動としてとるなら…とりあえず、食事を取らせて落ち着かせつつ、士郎の病院と部屋を特定、白魔導師にジョブチェンジをして高位回復魔法を行う。

最悪、サポ学者にして女神降臨を行いリジエネIⅤとレイズIⅤをかければ、集団回復を起こすはずだから特定されずらいだろうし、能力を試すのにもちょうどいい。

「なのはちゃん、とりあえずご飯にしよう」

まずは、飯だ。落ち着かせなければ話にならん。

なのはを落ち着かせつつ、戸惑う表情を浮かべさせたまま台所へと案内させ、また、渋い顔になるのを自覚する。

冷めた飯、電子レンジであつためれば確かに温かいのだがそれとこれは違う。

『暖かみ』のない食事など、如何に旨かろうと栄養に優れようとカップラーメンと変わらない。

このまま、あつたためて彼女に与えてもいいが、放置した場合に彼女が不安定になる可能性は否定できないどころか…さらにふん定差に加速させることになりかねない危険性が出てくる。

メニューは鶏肉のソテーとグリーンサラダか、スキルとレシピを頭の中から検索をかけ使えそうなメニューを考え、頷く、幸いFFXIで作れるメニューは代替え品さえあればすぐに作れるし、応用も十分に利く。

FFXIが終末期に入れられたアップデータの中で人気を博したものの一つ、ランチプレート。

数種類の食事をギルドが販売していたプレートと合成することで作られる多目的ブーストを可能にする『定食』である。

作るのはチキンライス・王国風オムレット・森のサラダ・ジンジャークッキーの4つにオレンジジュースである。チキンライスとオムレットを合成するとオムライスができ、それをプレートに合わせるとオムライスセットが完成する、FFXIであれば、オムライスはH

P / A G I / 攻撃が上がる食事なのだがプレートにすると更に M P / M N D / H m p があがる。

コストが高くなる代わりにステータスの上り幅が高く、高レベルエリアのボスを倒す時などは愛用される一つになったものだ。

勝手に厨房に入って料理するのも如何とも思った為、なのはに待つように促し家から材料とあるものをモーグリに言って倉庫から取り出してもらってきた。

「さあ、食べるがいい」

半分以上は桃子が用意したであろうものを加工しているため実際に使ったのは卵とオレンジ、少量の野菜ぐらいでクッキーは家の作り置きである。

申し訳なさに、どうしたら良いか分からずにオロオロしているなのはを見ていて和むものはあるが、目的を達成するためにもさつさと食べて情報を収集したいのが本音だ。

「でも、その、えっと」

「ふむ、割とよくできていると思うが…温かいうちに食べたほうがいい、冷めると不味くなる」

そこから更に少し迷っていたものの、空腹には逆らえず食べ始めるのはが目を輝かせてこちらを見た。

「おいしいです！」

「そかそか、たんとお食べ」

そこまで喜ばれれば上々、オムレツは H Q だったから味の補正もかかるのだろう。

昔は H Q は合成できない罠があったからなあ…などと考えているとクッキーとジュースを残してなのはが皿を下げてきた。

「よしよし、全部食べたな…お腹は一杯か？」

「うん！」

元気いっぱいに頷くなのはを撫でて、洗い物を再開するしながら横にいるなのはに声をかけた。

これこそが今回の目的にして肝。

なのはの歪み除去の最大の問題である孤独の解消である。

「しかし、君の姉は何をしているんだ？いくら忙しいとはいえ、まさか、店で働いている訳じゃないだろうに」

オレンジジュースを飲み終わった私にお兄ちゃんは、お茶を入ると自分の分を湯呑に注いで呆れたように口を開いた。

どうしよう――

お兄ちゃんに正直に言ったほうがいいのだろうか？お父さんは仕事で怪我をしたんだけど、周りには言っていない。でも、ちよつとならいいよね？

「えつとね、お父さんが海鳴総合病院に今、入院してるの…それで、お姉ちゃんは看病で」

「ええっ！？本当かい？それは…悪いことを聞いたなあ。」

聞くや否やお兄ちゃんは驚いてばつの悪そうな顔をしながら頭を撫でてくれる。

しかし、不意に頭に乗っていた重みは消え、目を開けてみるとお兄ちゃんは鞆を開けて何かを取り出していた。

「お詫びにこれを上げよう」

透明な液体と不思議な淡い白色の光を放つ欠片の入った瓶を、私に差し出した。

「これは？」

「これはお守り、願うとこの白い欠片は少しずつ消えていくって言われているんだ。きれいでしょ？」

良くぞ聞いてくれましたとばかりに胸を張って答えるお兄ちゃんは、今までの真面目そうな印象とは少し違って、受け取ろうとしない私の手に瓶を握らせるとそつと微笑んだ。

「夜に月のある方向を向いて願ってごらん、もしかしたら叶うかもしれない」

微笑みながら真摯な目で私を見るとお兄ちゃんは立ち上がり、大

きく背伸びをした。

「さて、そろそろ僕は帰るよ。お姉ちゃんによろしく」

「あ、はいっ！わかりました！」

お兄ちゃんに言われ、時間も時間なためこれ以上は引き止めれないと判断して、玄関まで送ると手を振りながらお兄ちゃんは帰って行った。

久しぶりに人とご飯を食べた…。

もちろん、幼稚園でも食べたりはするけど、こうやって家で食べるのは本当に久しぶりだった。

朝はお母さんがいるけど、準備で忙しそうで食べることはないし、晩はいつもレンジで温めている。

ああ、そうだ、すごく楽しかったんだ――

お風呂に入って寝る準備が整った頃、ようやくお姉ちゃんたちが帰ってきたのか下が若干、賑やかになる。

なんとなくのだけど、あの輪の中に入り辛くて、少しだけ顔を出してお兄ちゃんが顔を出してプリントをおいて行ったことを伝えたと部屋に戻って布団に入る。と、その時、机に置かれた瓶が目に入った。

願いがかなうかもしれない――

不意にお兄ちゃんの言葉を思い出し、私は窓に瓶を置くと静かに願った。

どうか、どうか、私の孤独を救ってください。と――

閉じていた眼をそっと開けると、窓に置かれていた小瓶から欠片が消え、淡く輝く水だけとなっているのを見て、私はその不思議な現象を不振がるよりも先に、小瓶を守るように、縋るように抱きしめて眠りについたのだった。

真夜中の寝静まった丑三つ時に月明かりが照らす病院の中に彼は

いた。

白と赤を基調にした衣装を身に纏い、見回りにくる看護師に見つかれば、すぐに通報されるぐらい、見事に浮いていた。

尤も、『見つければ』だが。

さて、ゆつたりと彼が緩慢な作業をして、だれにも見つからないのは『見えないから』だ。

インビジと呼ばれる不可視の魔法を使い、その場に立っている彼だが、スニークと呼ばれる消音魔法は使われていないため、音がダダ漏れして目の前にあるナースステーションから小さな悲鳴が聞こえてきているが、彼は気にしない。

だって、今の状態で驚いていたら、もっと驚く羽目になるのだから。

「白のグリモアよ、目覚めよ！女神よ、ここに癒しの加護を、ハートオブソラス！」

呟くぐらいの声なのだが、広い空間である病院では異常に音が響き、それと同時に現れ男に悲鳴が上がる。

むしろ、悲鳴を上げるなど言うほうが無理だ。

呟く声と同時に行き成り、目の前に男が白く輝く本を持って現れ、薄い青色の光が波紋を浮かべながら男を中心に広がっていくのだから、その怖さたるや想像するのも難しいだろう。

だが、無情にも言葉は続く。

「女神降臨の章、レイズエーヴ」

何も知らない人間から見れば、この言葉を吐いた途端、彼から無数の人魂が回りながら現われ、さらに光が溢れ気泡とも光とも取れない何かが彼の周りに大量に浮かび上がる。

「傷つき倒れるなかれ、汝は倒れる時に非ず。我は其の断りを許さず、女神は慈悲を与えたり」

神託の様に告げると男は手を天井にかざすとさらに光は強くなり、周りは光であふれたあたりで悲鳴を上げていた看護師は意識を手放した。

「女神降臨の章、ケアルVIE」

この光景は防犯カメラにも映し出されており、海鳴の奇跡として度々、茶の間をにぎわす種として使われる映像となるが、ここでは省かせてもらう。

映像は男がゆっくりと消えるその瞬間までおさめられており、そのあとに危篤患者も含む大量の怪我人が息を吹き返し、病院はさらに大騒ぎとなるのだが、そんなこと彼には関係のないであった。

実際目にしたらトラウマ確定だと思う。（後書き）

魔法の説明

メガンテ・・・言わずと知れた自爆魔法　ただしDQからリジェネ・・・3秒ごとに一定のHPを回復する。

レイズ・・・戦闘不能・死亡のスタータスから回復させる。

ケアル・・・言わずと知れた回復魔法

アビリティ

白のグリモア・・・学者にて使用可能なアビリティ、白魔法に分類される魔法に消費MP、リキャスト（再詠唱）などにボーナスを得ることができる。

女神降臨の章・・・学者のジョブをメインもしくはサポートにつけているときに発動可能、単体にしかかけれない魔法を全体化することができる。ただし、FFXIにおいてレイズやヘイストなどといった魔法は本来範囲化することができないが、これは末期においてその制限が外された。と想定しています。

その他

FFXIでは『食事』という行動をとるとステータスや攻撃・防御・命中・回避などにボーナス補正を受けることができます。なお、ラッチプレートは実装されておらず、ちーとになりすぎない程度に実装されたらええやん。という筆者の願望から実装されています。

今後、妄想爆発な装備品やら設定が出てきたりしますがまあ、実装されるといいなあ程度に考えておいていただけると幸いと存じます。

ちなみに、なのはが作品中に行ったのは『合成』といわれる生産行動に当たりますがそんなのは当然彼女は知らず、何に変化したのか

もわかっていません。さて、蒸留水でできる合成品といえはなんで
しょう？

無駄だった。のか？（前書き）

あんまり短すぎるようでしたら行ってください。

短すぎなくてもコメントをくださいorz

前もっていうと、理由はどうあれsttsまで見たけど彼らは家族としても親としてもどうかと思う。

無駄だった。のか？

人生とはままならないことの連続であり、日常は非日常の積み重ねである。

何が言いたいかと言うと、結果的に何も変わらなかった。とだけ言おう。

なのはの歪みを除去して『無印』であつたとしても、あの性格が変われば、意味の分からない説得という名の暴力や押しつけがましい善意から逃げられる可能性が増える。なにより現状の最大の問題であつた高町美由希の生徒間の不和に関する相談が、取り下げられる可能性が高くなると踏んだためだ。

が、しかし、現実はその動いてはくれなかった。

あの一家、末娘ほっ婆いて、起きたばかりの親父はリハビリに母親は店に本格的に集中しやがった。

蓄えがないとは言わせない、何年も前なのでうる覚えだが、どう考えても親父のほうは高度医療を使っており、申請をすれば結構な額は戻ってくるはずだし翠屋は連日満員御礼、周りにライバルらしいライバルも存在しない。

独占禁止法違反じゃないのかとさえ思えるほどの人気っぷりを発揮している。

確かに、ここでさらに地盤を固めようと思うのは商人として間違つてはいない、自分の技術が認められより安定した収入につながるのならそれに越したことはないのだから。

だが、である。

娘を放置していいものか？

様子を見たことがある。

1度や2度ではない、しかし、その中に一日として仕事を早く切り上げ帰ることはない。

売切れれば次の日の仕込みと新たな商品の開発を息子と一緒に

やる。

嗚呼、一人息子なら、美由希と彼ならさぞ理想的な家族なのだ。

息子は母を手伝い、娘は父を支える。

結論的に言えば、あの家庭は子供が一人か二人で定員となる家庭と言える、いや、事故がなければまだ違っただろうが、なのはが劇中で言っていた『私はこの家では浮いている』だったその当たりのセリフはなかなか的を得ているのだ。

同時にここには『とらハ』にいる居候がない。まだ来ていないのか、やはり無印だからなのか、これでは彼女に目を向けるものがない。

これはまずい。物凄く不味い。どれくらい不味いかと言えば、生命感知のモンスターだらけの場所でリレイズを行使しなければいけない位には不味いのだ。

なぜ、不味いかつて？

あのエリアあらため、BFたる『Takamati Home』に俺がプリントを持っていかねばならないからだ。

その回数、すでに3回。

2回目の時はよかった。出迎えたのはが嬉しそうに、俺に報告してきたからだ。

曰く、お父さんが目を覚ました――

と、人外の構造は知らないがすぐに退院できるだろうと踏んでおり、当時、俺は樂觀視してしまった。

レイズで死の淵に居ようとなんだろうと対象を指定した上で、女神降臨を使い範囲魔法として使い、PTにしかつかえないケアルガを止め、ケアルに女神の印と女神降臨を使い、HPが1だろうと完全に体力を戻した筈なのだ。

しかし、あの一家、あんなことはないようにと病院でリハビリにいそんでいる。

3回目を訪れた時になのはがしょんぼりしながら俺に教えてくれた。

聞いた瞬間、ファイジャあたりでもぶち込もうかと思ったのはここだけの話である。

そして、同時に発覚した驚きの事実――

スキルもない癖に渡した蒸留水を聖水にしていやがりました。

何、この魔王？

しかも、手に取ってみると頭に浮かぶ表記に『聖水*3』とある。H Q成功してんじゃねえ！と叫び、魔王のスペックに恐れ慄きそうになるが更なる恐怖がそこに待ち構えていた。

晩飯に誘われました。

いや、幸いなことに翠屋じゃないんですがね？魔王猊下直々のお手製なわけですよ？

いや、そこらへんに良く出ているOHANASHIなんて出来ない筈だしされても逃げる訳ですが、こうやって出されると不味い。

いや、だって考えてくださいよ？小つちゃい子が一生懸命『ナニカ』を作っているんですよ、台所で。見に行ったら座って待っててくださいって言われるし。

いや、待つしかないでしょ？ここで下手うつと本当に呼ばれかねないし。

混乱のあまり、いや、と何度つづけたか分からなくなってきたけど出されたメニューはサンドイッチと元々あったサラダを分けたものだ。

予想していたより、遥かにまともである。

正直、カタゆで卵とかを想像していただけにこれは良い意味で期待を裏切られた。

何気なくサンドイッチを手にしたところで気が付いた。

サンドイッチの具である。

FFにも末期に追加されたものではあるがほかのサンド系やおにぎり系同様、中身の具の選択があった。

何が言いたいのかと言うと、具が高度すぎる。

挟まれていたのはハンバーグ、決して彼女が簡単に手を出せるメ

ニューではない。

何より、俺がトースターと電子レンジを使う以外の音を聞いていないのだ、作れるはずがない、と言う事は彼女用に用意してあった食事をサンドイッチと言う形にすることで量を補ったとみていいはずだ。

そして、ここで何よりも難しい選択肢が生まれ出る。

ハンバーグサンドをワザと齧り付き、ゆっくりと咀嚼しながら皿を見る。

皿の上にあるのはベーコン&レタス、チーズ&トマト、ツナタマゴの3つ。

ハンバーグを含めた4つの内、いくつかは本当に『手作り』なのだ。更に言えば、彼女にとって褒められたい一品が紛れ込んでいる可能性が高い。

あの『なのは』が『良い子』であろうとする以上、何かしら褒められるであろう行動をとると予想するに容易く、前回、前々回の対応から考えて何らかの対処をしてくることは明らかともいえるからの判断である。

情報を整理してみよう。

おそらくはハンバーグ + α が彼女の夕食だったと思われる。

そこからレタスやチーズは冷蔵庫に入っていた可能性が高いが、残りの怪しいものはベーコンとツナタマゴである。

普通ならツナタマゴと答えるのだが彼女は卵は茹でていない、と言う事は卵も冷蔵庫にあったと考えていいだろう、ツナとあえて出したのは間違いなく彼女だが、それを言えばベーコンを切って出したのも彼女だ。

何を褒めるべきだろうと続いて手を出したサンドイッチを手にして気が付いた。

温かいのだ。

なるほど、頷き、何を褒めればいいのか見つけた俺はようやく、不安げにこちらを見るなのは頭を撫でた。間違っていないことを

必死に願いながら。

「ちゃんと、具材を温めたり、パンを焼いたりしてくれたんだ、ありがとう。美味しいよ」

そう、褒めるべきところはそこなのだ。

一々、考えないで答えてもいいが、できるならば問題は避けたいとなるとやはりこうなった。

二人でそのあとはゆっくりと夕食を平らげ、食器を洗い帰り支度をする。

この時なのはは、なぜか鞆を持って見送りをしてくるが、毎度の流れで今回もそうだろうと信じていた俺が馬鹿だったのかもしれない。

自分自身が明らかなトラブルメイカーとも言うべき特異点がここであるのだ。

何も起きない訳がない。

「ただい…ま？」

「おかえり、プリントは置いてある。SHRまではいたんだから説明はいらないともうが何か質問は？」

なのはの見送りを受けて玄関を出て表門から出ようとしたところで高町美由希が出てきた。

「えーと」

言わずもが不信を含んだ目で見られる。プリントを持ってきてくれたことは感謝こそしているが、何故、こんな遅くに家から出てきたのだろうと疑問に思うのは当然と言える。

これがまだ、私服ならよかったが学生服に鞆持ちである、家に帰らずにまっすぐ来たのに関わらず、今は午後8時を回ったあたり、これを不審と見なくてなんとする。

「妹さんが夕食を御馳走してくれたので御呼ばれただけだ」

「ああ、なのはが…って、そうだ！信濃君、なのはにご飯作ってあげてなかった？」

「それが何か？」

冷蔵庫の食品には手を付けていないが調味料は使っているし、普段と違う場所になべやフライパンを置いておけば気も付くだろう。

「ごめんね、なのはが迷惑かけて」

玄関のほうからビクン、と動きがあるのがわかる。

この戯けは、なのはの歪さに磨きをかけたいのかなんなのか…もしくは俺に迷惑をかけたくて仕方がないのかどれなのだ？

「迷惑…ね、どちらかと言えばお前の行っている行動が迷惑なのであって、あの子に関して何ら迷惑はかけられていないな、あの年なら出来すぎた行動ととれる。そもそも、気まぐれであの子と遊んだだけだ、そっちが気にすることじゃないな…ああ、調味料とかを勝手に使ったのはすまなかった」

尤も、と一旦言葉を切り、美由希が呆然としているのを無視して言葉をつなげる。

「学校にきているくせにプリントも受け取らないで、その上、家で健気に留守を守る妹をほっぽりだして、夜遅く帰ってきた拳句、冷えた飯を食わせた事を棚に上げてあの子を怒るようなことはしてやるなよ？」

「それは…！」

反論しようとするものの手ごころな反論材料がなかったためか、言葉を止めた美由希が小さくわかったと頷くのを確認して、俺は家に帰った。

用は済ませたし、会話もした。

ついでに言えば、態々、担任のメンツも立てて届けなくてもいいプリントを届けていたのだから、もう頃合いだろう。

彼女は学校には来ている。

にも関わらずプリントを届けなければいけない理由の一つ。

この問題を解決するためにほかならず、教師による介入を強く出さないようにするためだ。

話をする機会を欲していたのだが手が不味い、と言うか状況だな。人に話しかけるには礼を失しているのだ。

少なくとも、プリントを回してもらうように手を回したのなら待つなりなんなりすればいい、が、彼女はしなかった。

父親を優先するのはかまわないが、足止めになのはを使い、いざ、来てみれば自分は悪くない、あくまで足止めしたのはなのはと匂わず物言いは姉の言うセリフではない。

もちろん、これは穿ちすぎる見方でただ、端にお礼を言っているだけでも見て取れるし、父親を優先せざるを得なかったかもしれないが付け入る隙を見せているほうが悪い。

親に迷惑がかかるのは避けて通りたいところだが、このまま、ずるずると折れるならさっさと小細工を入れたほうが後々楽だ。

父に電話を一本入れ、面倒なクラスメートに絡まれ迷惑をかけるかもしれない旨を述べ謝ると、快く頷く訳ではないが積極的な介入も否定もなく。

「まあ、君が我が儘を言うのは珍しいし事情があるんだろう。迷惑ごとがこちらまで来てから考えるさ」

との回答を得た。

まあ、めんどくさくなるのはここからが本番だった訳なんだが…。

無駄だった。のか？（後書き）

ファイジャ：黒魔法精霊魔法属に分類され、ファイア・ファイガ・ファイジャと三種類に分かれる。なお、古代魔法というジャンルにフレアという魔法が存在しこれが火の属性魔法にあたる。

聖水：光のクリスタル（合成などに使われるエネルギー物質）と蒸留水を合わせて作られる、祝福された水。呪い（MaxHP/MPダウン）や死の宣告（カウント終了後戦闘不能状態）を解除するのにつかわれる。

B F：バトルフィールドと呼ばれる空間がFFXIに存在しイベントボスや特定のアイテムを使用することでB Fに突入し戦闘となる。今回のケースは『プリント』というアイテムを高町家の門とトレードして高町家というB Fに行ったわけですね、ハイ。

前書きの続きで、小さな子供一人放置して我慢を強要させて歪ましい訳はないしフォローに入る訳でもなく家族ではなく、互いを優先させている。

兄弟ならまだしも親がやってはいけないのではないか？もしくは新婚アツアツでもやっていける状況を作って熱愛っぷりならまだしも手のかかる子供がいるのに互いしか見ず、夜こっそりと家を抜け出しても止めもしない。果たしてそれは信用なのか？桃子は探しに行くわけでもなく、誰一人家から出ないで待つてる始末、何がしたいのだろうか？この家族？パトカーが鳴り響いて走り回っている。アニメのほうじゃ電柱が折れていたし周りの被害もシャレになっていない。劇場版でも同様に公園に入っているけどその過程で物は壊れているわけで、電線が切断している可能性も高い、切断しているということは火災が発生していてもおかしくない訳で少なくとも小規模な停電などが起きており、周囲が静かである要素など何一つない。現になのははパトカーを見て逃げている描写もあること、なのはが

走って家から出たことを考えるとどう考えてもそんなに離れているわけがなく、そんな中、兄貴が仁王立ちで玄関に待っているだけ……正気を疑うに十分な光景ではないだろうか？
と、なんとなく持論を書き綴ってみました皆さんの意見はいいか？

小さくても魔王、逃げれません。(前書き)

初感想いただきました〜！

ありがとうございます〜！

更新速度維持目指して頑張らせていただきます。

切りが良いので短めで投稿させていただきます。

小さくても魔王、逃げれません。

正直、行動力と言うものを甘く見てた。

しばらく、彼女が大人しくしていたところから遂に諦めたかと喜んでいた矢先のことだ。

高町士郎がリハビリを終え自宅に帰ってきたのを祝ってパーティをするらしいので参加してほしいと美由希から直々のお誘いを受け

「なのはも会いたがつてるし、よかつたら」

「よくないので断る」

断った。

「君の希望であつた日常的に会話もこなしているしこれ以上の譲歩する必要性が全く感じられないそもそも参加する名目はなんだ？家族の団欒に異物が紛れ込んでいいはずがないと言うよりも何か月単位でようやく家族がそろうのだからそこは一家庭の区切りをつけるなり店の従業員を誘ってやるなりすれば良い訳で俺を呼ぶ意味はまったくそこには存在しない仮になのはが会いたいと言うがそれはパーティで会う必要が皆無な訳だが理解しているか？理解できなくとも構わないがパーティは遠慮するしなのはの件に関してはこちらで一考する。以上だ」

一言でまくしたて回れ右をして教室を出る。

が、誰が言つたか魔王からは逃げられない。は現実にあるようだ。だって、校門を出たところに魔王が目の前にいたから。

「あ、あの！」

魔王は顔を真っ赤にしながら袖をつかんで意を決したように口を開いた。

「お店でお祝いをするので一緒に来てくれませんか？」

振りほどくのは簡単だし逃げるのも簡単、だが、そのあとの評判がどうなるか分からない。そもそも、如何に相手が魔王だろうと今

は、幼児なのだ。つらく当たるなどできるはずもない。

結果――

「……はいはい、行きますよっと」

ため息一つつきながら、学校を後にした。

にこにこと嬉しそうに笑うのはと疲れたような信志、そして、
空気のように忘れ去られた美由希を連れて――

レイズとケアルについては、病院で行った魔法によりある程度、
推論が立てられていた。

元々、この魔法は女神アルタナの慈悲によって行使されるものではあるが、なぜか獣人などの女神とは逆の存在であるはずの男神プロマシアを信仰している側にも効果がある。

尤も、それぞれに理由はあるが。

とりあえず、その話はそこそこに置いておくとして、ケアルとレイズが効く条件として生命力が上げられ、魂に力があるか否かがその分かれ目となると考えられる。

HPが0の場合、魔力で一時的にHPを補うための術式であるレイズが使われ、完全に定着するまで衰弱の状態となり、ケアルは魔力を持つて傷を塞ぎ体力を補完する。

つまり、病院で奇跡の恩恵を受けたものは一定の魂の強さを持つており、こぼれたものは寿命ないし生きるだけの魂を持っていないかったと考えていた。

なぜ、こんな取留めない事を考えているかと言えば、現実逃避である。

と、言うよりは俺のした行動に意味はなく、なのはなのはなになるべくしてなのはになったと、認識をさせられざるを得なかった。だからだろう。

隣で魔王が甲斐甲斐しく俺の世話をしている。

お茶のお替わり如何ですか――

あ、何か食べるものもってきます――

幼稚園で――

この前、テレビを見てて――

お留守番してた時に――

何一つ、家族に関する会話がなかった。

いや、見ていればわかる。

彼女は家族の会話に交じれていなかった。

高町夫妻は仲良くしゃべり新婚のようだ、兄妹も恋人のような睦まじさを見せており、時折、夫妻と兄妹は相手を変えながら喋っていた。

ただ、なのはにかけられた言葉は少なく、俺も同様である。

精々、謝罪と感謝の言葉。なのはには寢めの言葉が述べられ、夫妻も兄妹も他の来客への対応で忙しそうにしていたのを見て、なのはの頭を撫でながら何度目ともしれないため息をついた。

信志は不機嫌だった。

理由は簡単、目の前の存在が原因である。

パーティーは終わり、帰るつもりが呼び止められ、所謂、家庭の事情を根掘り葉掘り聞かれた。と、言うよりは確認したと言ったほうがいいだろう。

現在は一人暮らしに近く、親はあまり帰ってこない。成績は並、友人関係は良好。

母親が一緒じゃないと答えた後は何も聞かないあたり、そちらの情報も流出していると考えて間違いないだろう。

あの見合い男、俺の情報流しやがったな…。

「なのはも懐いているし、良かったら家に来ないかい？」

「結構です」

善人ではあるのだろう土郎の申し出をきっぱりと断った。

独論ではあるが、善人には2つのパターンに分けている。

周りの人間を幸せにする善人と自分だけが幸せになる善人だ。

前者は周りのことを考えて動く人間で、過程を進みながら満足していくタイプ、後者は良かれと思えば一直線に行い、目標の達成を見て満足するタイプ。

さして違いはないようではあるものの、最大の違いは拒否できる善意と押し付ける善意である。

分かりやすく言えば、彼らは店の店員で、信志は客にあたり、何かを買うとして、前者はカタログを渡すだけに対しアドバイスに徹し、後者はこれが良いと決め只管にそのみを進めてくる。

買い手は、品を買うのもやめるかもしれないし、何か買うかもしれない。希望の形や性能、機能を求めている場合もある。前者は柔軟性があるのに対し後者はそれがない。

これが最大の問題である。

なぜ、そのようなことを今更、長々と考えているのかと言えば、この押し問答、既に5回目であるからだ。

もはや意味をなさない筈なのだが、ここにきて彼らが手にしていた電話を信志に渡した。

『信志か？高町さんから話は聞いた、結構じゃないか。お前もすっかりはしているがまだ子どもだ、下宿も考えたがお前が嫌がるだろうしと思っていたが先方が乗り気なら私はかまわん』

『父さん！？』

いったいどんな説明をしたのだろうか？ひとり家に残すことに抵抗を覚えていた父からすれば確かに渡りに船でありありがたいことこの上ないだろう。信志は現状と高町夫妻の周辺の評価を考え、頭を抱えた。

夫妻は周囲からの評判もよく、兄妹の反応も悪いものはない。

娘をよこすならともかく、寄越すのは息子で向こうが乗り気ならば尚のことであろう。

『まあ、どうしても嫌なら構わないが、先方さんにも失礼のないよ

うにな』

『まって…』

嗚呼、こうなつては断ること自体が『失礼』にあたつてしまうのを父親は理解したうえで行つたのだらう。

面倒だ。

物凄く、面倒だ。これが、彼の偽りない感情だが下手に断り波を作るのはまずいし、避けたところで美由希となのはが付きまとう可能性は高く、ここに住んでいる以上、避けることはできない。

つまりは、既に彼は詰んでいるのだつた――

「はあ、では、よろしくおねがいます」

信志はあきらめ、何度目かになるか分からないため息をついて頭を下げた。

小さくても魔王、逃げられません。（後書き）

レイズとケアルの考察について・・・

ケアルとは怪我や体力の低下を回復する魔法と考えています。

これは血液などを含まれる生命の維持活動に必要なエネルギーの補填であり、常に消費されるものを魔力で補い保管した形になります。

レイズは、著しい損傷：肉体的もさることながら人間における『魂』の部分にダメージを負った状態と考えています。

エネルギーをためておくはずの器たる魂が傷つき生命活動が維持できない状態をさし、魔力で器の傷を覆い徐々に補修させます。F F X I では衰弱という状態がこれに当たり、修復が終わると衰弱は戻り低下していた体力やM P が元の値に回復します。

以上、F F X I と魔法の個人的な考察でした。

始まりと終わりに（前書き）

原作と本作で完全に離解します。

なので、原作万歳！やなのはさま至上主義、アンチものが嫌いな方はすみやかにお戻りください。

正直なところ、このオリ主にかかわらなければ原作通りの名の葉が誕生していたのですが悪影響が出てきてこう変わりました。

始まりと終わりに

さて、衝撃の強制イベントから一か月ほどたった。

その間にもなのは面倒を見るものがおらず、信志がなし崩しの面倒を見ることが続き彼の意思に関係することなく、なのは好感度を稼いでいることになるがそこはまあ割愛する。彼の精神衛生面を顧みて。

彼は学校のパンフレットを読み漁っていた。

目的は、とある条件を満たす学校を探すことにある。

風芽丘では無理、と言うより海鳴市において今のところ条件を満たすところが一つもないのだ。

その条件とは…。

「なんで、寮がないんだ…」

高町家を抜け出すための条件に必要と信志が考えているもの一つ、寮がある。

かと言って、家から離れすぎれば父親にまた別の気を使わせる。

そもそも、寮があるところであつても高町家は家から通えと言ったのが予想されるだけに面倒なだけかもしれないがやる価値はあつた。「聖祥か…」

避けたいところではあるがそれ以上に条件が魅力的だ。

勉学や運動など成績優秀者には特待制がとられさまざまな形で恩恵にあずかれる。

ついでに言えば、なのはが来年はいる小学校と高校では訳が違うし、適当に部活に入れば寮もいるのも、高町家に寄り付かないのにも良い訳としては上等だろう。

いっそ、海鳴市から出ることも検討に上げるべきと信志も考えたが良くも悪くもこの土地に愛着があり、父親がここを帰る場所と決めているならそれを守るのも子の勤めと割り切っていた。

ある程度成長したらば、この地を離れてもいいし、この地で何か

始めてもよいだろう。幸いなことにFFで培った技術は想像を絶する苦しみとともに脳にインプットされている。

が、どのような道を選ぶにせよ強制されなければの話であって押しつけの善意で固められた道など歩きすらない。

信志とって、選択は責任を負うものであり、任意であれ強制であれそれは変わらない。

選んだ以上は事情がどうあれ、責務を全うしなければならないからだ。

尤も、これは前世での仕事の理念から来ているものだが、信志はこの理念を気に入っているし間違っているとは思っていない。

然るにこの状況は信志にとって面白い展開なのだ。

親への恩は返す。母親がどうなるかと知ったことではないが、生んでもらった義理もある。しかしながら、父親ともなると話が違ふ、気が付けば世話になりっぱなしで受けた恩は数知れず、礼を言えば『親とはそういうものだ』と返される始末、当たり前のことを当たり前前にしている親に恩を返す当てははまだ見えない。

いずれ、結婚して子供が生まれたならば、その子供の返そうとは思うがそれとは別に父へ何らかの感謝を残しておきたいところではある。

故に、父の希望は極力応える。いや、応えなければならぬと信志は考えていた。

だからこそ、父親を安心させるためにもこの高町家下宿の話も飲んだ。

卒業が迫ってきたこの時期、抜け出す数少ない機会が進学である。国立を最初は考えていたのだが、この海鳴に関して言えば国立は近隣にすら存在せず、信志の考える条件である寮がある学校も少ない。

これは海鳴の立地がベッタタウンであることが大きい、家があるのに態々、寮を選ぶ人間が少ないためだ。

そんななか条件を満たす物件を見つけた。

気にしていた金銭面だが公立に比べれば割高ではあるが、何らかの特待制度を得ることができるのであればむしろ公立より安い。

少々、ズルいかも知れないがここはジョブをフル活用させてもらう事にしよう。進学先を高町家に伏せたまま、父に相談したところ、快い返事をもらっている。

難色を示すかとも思ったが、年頃の娘がいるのに下宿するというのは父親である彼としても抵抗感がなかったわけではないらしく、むしろ、迷惑をかけて申し訳ないという苦々しいものが割合としては多くなってきていた様で、入寮もできる学校である旨を報告すると学校のレベルの高さに驚いてこそいたものの、頑張れとのことだった。

ただ、最大の問題であるこの一家をどうするかが残っていたのだが――

「信志君、それは本当なのかい？」

「はい、高校に入るのを転機としてこちらから出させていただきま

す」

土郎の問いに正座の姿勢を崩さずにはとうなずいた。

「無理に寮に入らなくてもいいんじゃないかしら？なのはだって懐いてるしせめて受験までここに居たらどう？」

「いつまでもここに居る訳ではないですし、高校に入れば今のようになのはの面倒を見るのも難しくなります、それに受験勉強に専念したいので」

彼女に懷かれてしまったのは問題ではある。

面倒を見た以上は責任が伴う。故に彼は性格の歪みを直すべく手を打ってみたものの結果は芳しくない。

結論だけ言ってしまうえば好感度と言うか依存性を引き上げてしまっただけなのだ。

それも、『良い子』ではなく、本人を見てくれる人に。それは、高町家の人間にとって望むことのできない壁を作ってしまう。かと言ってなのはの面倒を見つつけるのは御免被る。

果たして、彼女はまた、あの状況に戻されて耐えられるのだろうか？

情がないと言えは嘘になるが、このままなし崩しは回避したいし、そもそも、それを直すのは親の役目であって他人である信志のなすべきことではない。

無論、放置する訳ではなく多少ならばフォローもしようと信志は考えていた。

尤も、それは信志の領域を侵食しない限りと線引きされているが。「別にこつちで勉強してもいいんだけどね、一人は大変じゃないかい？」

「問題ありません」

未練がましく引き留めようとする士郎に信志が断言する。

「つらくなったら、いつでも戻ってきていいのよ？なのはも顔を見たらがるだろうし」

「つらいと自覚したら戻ります」

残念ね、と頬に手を添えながら言う桃子に、内心はそんなことはありえないだろうと信志が思いながら答えた。

そして、引き払う当日、ボスが動いた。

玄関口で信志は足止めされている。

具体的にはなのはに服をつかまれて泣きつかれているのだ。

『良い子』のなのははそんなことをしないだろう。

だが、信志は一か月の間に彼女と触れ合い、『普通』の子供として扱った。

恐る恐る我が儘を言った彼女に付き合い、正しい事をすれば褒め、悪い事をすれば怒る。

それが、彼女にとってどれだけのカルチャーショックになるとも知らず、行つた。

ある意味、彼は甘く見ていたのだろう。

前世ではそれなりの過程でそれなりの愛情を受けて育ち、今世では片親でこそあるが与えられた愛情は何ら遜色ない。

愛情に飢えた子どもに与えてしまった時の反応を全く考慮していなかったのだ。

彼にしてみれば、多少でも普通に近い生活を行い子供らしさを取り戻してほしい。位なものだったが、常に愛情に飢えていたなのは違う。

それは、劇薬にも等しい効果をもたらす。

決して、高町家においてなのは愛されていない訳ではない。が、注がれている訳でもない。

朝は家族と食事をとり、晩も家族こそいないが食事は用意され、子供の喜びそうなおもちやも揃えられ、学校も名門私立に入れてもらっている。

ただ、そこに足りないものがあるならば、触れ合いだろう。親や姉はリハビリと称して、修行三昧。そこには兄の姿さえ見られる。

なのはとて、家族と痛くて希望しなかった訳ではないが「怪我をするといけない」と言う理由で断られ「なのはの事が心配なんだ、わかるな？」と言われれば、それ以上言えない。

母も同様、兄も手伝っており自分も何か手伝えないかと聞いても父と似たり寄ったりな言葉で断られた。

詰まるところ、信志と触れ合ってしまったが故に家族と折り合いをつけてしまったのだ。

嗚呼、この人達はこのいう存在なんだ――

と、ある種の諦めが混じり従順に接することを彼女は選んだ。

家族、家族と言いながら彼女の位置はペット・家畜と変わらないのだと、彼女は理解してしまっている。

ただ、それは間違いでもあるのだが否定する材料もない。

ぜいたくな暮らしをさせて気が向いたら構う。要求するのは従順で尻尾を振ってじゃれてくる可愛いペット、そう考えてしまうと彼女はすっと心が落ち着いた。

続けて彼女が無意識下で行ったのは他の対象を探すこと。

対象は二つ直ぐにできた。

友達と我が儘を言っても何をしても見捨てずに『良い子』と頭ごなしの説明をしなかった信志である。

関わり合いになりたくはないものの、小市民性と言うべきかお人よし加減が抜けきらない信志が目の前にいたなのは放っておけなかったただだが、彼女にとってはそれは砂漠に彷徨っていた旅人が見つけたオアシスに見えたことであろう。

もう一つは、友人なのだが、彼女の以前の立ち位置が災いし「いてもいなくても変わらない」と言うポジションを堅固なものにしており今更それを崩せず、無理して崩して今以上の孤独にさらされるのが怖く動けなくなっていた。

だから、彼女が家を離れようとする信志に縋ろうと言うのは必然ともいえた。

無理を言って嫌われるのは怖いが、離れられるのはそれ以上なのはにとつては恐怖であり、曲がりなりにもようやく我が儘と言う甘えを受け止めてくれる相手がいなくなる。

親に絶望し、兄妹に諦めを見た少女にとってそれは、譲れない一線だった。

「いつちやうんですか？」

ズボンの裾を握りしめ、目には涙を浮かべた少女が懇願している。それだけで撤回する人間もいるにはいるだろう。

が、信志はそこに入るモノではない。

端的に言えば、他人よりも自分を彼は取る。冷たいかも知れないが、彼が望んでいるのは血肉沸き踊る冒険ではなく、平穩無事な人生である以上は仕方なしと言ってもしようがないだろう。

「勉強しないと行きたい高校に行けなくなるからね」

良くも悪くも本音である。

未だにこの国は学歴社会であり、尚且つ、資格社会でもある。

彼が得た技術から一定以上の評価は受けることができるだろうがそれにしても限度がある。人が人を評価するにあたっていくつかの

項目がありその中に、必ずと言っていいほど学歴が入る。

高学歴で関係ない職業についていたところで変わり種として見られるだけだが、逆はそう見られづらいのは確かだろう。

好意的に見てくれる人ばかりではない。それが世間と言うもので下世話であればあるほど、食いつく人もいる。

何より、ここらで離れなければなのは小学校へ上がり、繋がりが必要以上に強化されしまい抜け出すのが難しくなり、抜け出すためにどうしても必要な一手となったのだ。

「私のせいですか？我が儘ももう言いません、悪いところがあるなら直しますからっ！」

「そうか、そう考えてしまったか…。それは違うよ？自分のために動いているんだ」

「自分のため…？」

セリフをオウム返しのように呟くのは信志が目線を合わせて頭を撫でながらセリフを続けた。

「そう、自分のため。確かに『今』は大切だけど、その上がある。欲張りすぎかもしれない、けど、上はある。そして、上に行くだけの状況にある。それは少し大変かもしれないけどそこで得たことはきっと無駄じゃない、だから先に行くんだ。欲しい未来がそこにあるはずだからね」

ここで別れることは『高町』と言う中心点から離れることになる。

3〜4年ぐらい、離れていればおそらくは大丈夫だろう、そのころにはなのは4年生、そうなれば向こうが忙しいだろうし、思い出に代わっている可能性も高い。

「だから、暫しのお別れ、もう会えない訳じゃない。だから大丈夫、ね？」

「……また、お話してくれますか？」

握っていた手が緩め、そっと信志を見るのはに満面の笑みを浮かべて頷いた。

「もちろん！」

そうして、時は過ぎる。

そう、無印の時代へと

始まりと終わりに（後書き）

次で一気に無印に飛び舞す。

闇に舞う。(前書き)

本格的な戦闘描写・・・これのなんと難しいことか・・・。
できればコメントやアドバイスをいただけると助かります。

闇に舞う。

俺は今更ながらに自分の言ったことを後悔していた。

確かに話をしてくれるかと問われ、もちろん。と答えた。ああ、答えたともさ。

だけどな、登校狙つてとか買物行ったら目聡く見つけてくるんだよ。

高校2年になったのに、彼女一つ作れない。

あんまりだろう…勉強自体は何の問題もない卒業も学歴も問題ない、が、このままでは灰色の学校生活と言うものになるんじゃないのか？

「と、言う事で突然だが、彼女を作ってみたいと思う」

「何を言ってるんだ、信濃？いるだろう、態々、弁当まで作ってくれる可愛い彼女が」

そんな突込みを返してくるのは、大阪^{おおさか} 虎勝^{とらかつ}である。

「小学3年生を彼女にしている高校2年って犯罪だろうが…そもそも、彼女は彼女ではなく懐いている近所の子だ。俺がほしいのはステディな女性だ！」

「んなの、美由希ちゃんだっけ？あの子狙えばいいだろ！何が不満なんだよ！」

「全部だ！あ・の・な！俺がほしいのは平穩無事に過ごせる毎日であつて商店街に行くたびに殺気を浴びせられる日々じゃないんだよ！」

そう、原作と変わってきているのだ。

高町なのははこちらと積極的にかわりを持とうと動き、『良い子』からの脱却を図ったらしい。

高校に入ってから、もう一度高町家への入居を進められたが断り寮生活を続けているのだが、週に一度程度、家に帰るタイミングを逃さずなのはが弁当を作ってもってくるのだ。

そのためののかなんなのか、嫉妬なのか、高町兄から商店街に入るだけで殺気を向けられる事態となっている。

積極的にかかわりを持ちたくない俺は、先ほどの大阪虎勝の進めもあり、野球部へ入部し接触の制限に成功した。

が、今度は試合に顔を出すようになったのだ、しかも、親友たる二人を連れたトリオで。

なのはの過剰なアタック？により、おかげで周囲にはロリコン疑惑がかけられている有様…しかも、なのはは俺絡みになると頑なに言う事を聞こうとせず、最近では会話も減ってきていると美由希が愚痴を漏らしていたのを以前、捕まった時に聞いた。

「ったく、いい気なもんだなあ、おい。レギュラー先発かった大一番が近いってのに」

「なるようにしかならんだろう？」

「まあ、そうなんだけどよお…まあ、レギュラーとかになれば彼女もできるんじゃないのか？俺としてはそろそろ、野球に集中してだな…」

何気ない、虎勝の一言に俺は雷に打たれたと思うほどの衝撃を受けた。

「……って聞いているのか？才能はあるはずなんだからやればお前だってレギュラー入りも十分あり得るんだぞ！」

横でわめく虎勝にも彼女はいる。

1年のことからレギュラー入りしたこいつには才能があるのだろう、ピッチャーとしてプロも注目しているらしくそんな、彼に推薦された俺も期待はされていたのだが必要以上の注目は嫌い、ある程度の補助金が出る程度の成績を出すとそれ以上はやらなかった。

が、こいつだけは手を抜いていると感じたのか俺にまじめにやれと言ってくる稀有な人間とも言える。

話が逸れたが、バカの代名詞と言えそうな体育バカのこいつでも彼女ができたのだ、うまくすれば俺にもできるかもしれない。

「そうだな…気合い入れてみるか…」

「お、ようやくやる気になったな、この野郎！」

そんなことを言った放課後……。

「特訓だあああああ！今度はてめえに打たせないボールを編み出してやるからなああああああ！！」

と、土手を走る彼の姿があつたらしい。が、そんなの俺が知るわけがない。

もつとも、この行動で後悔することになるが、目先の利につられた天罰なのかもしれない、が、ふにおちねえ…。

淫獣イタチが空から降ってくる日がいつなのかなんて当然、覚えていない俺は魔法を扱うジョブを外し勝手の良い忍者とサポートに踊り子を入れて日々を過ごしていた。

忍者は盾ジョブ・タンクと呼ばれる種類に分類され、パーティを組んだ場合に敵からの攻撃を引き受ける役のを指す。

思い浮かべるなら本作品でも有名なナイトや他のゲームなどでも出てきそうな守護騎士、ジェネラルなどをイメージしていただいたいが、この忍者の最大の特徴として避ける盾役と言う役割を担う。

守る以上はどうしても被弾するのだが、忍者においては回避性能の高さと忍術の一つが反則じみた回避性能を誇るモノがあるため盾として可能になった。（運営もその運用は想定していなかったそうだ）

『汚い、さすが忍者、汚い』などと言う黄金の鉄の塊が残した言葉もあるが、それまでまっとうにナイトを上げてきたものからすれば、まあ、気持ちは分からはくはない。

踊り子は踊りに様々な効果を持たせている。回復であつたり、支援であつたりと多種多様であり中衛としての役割を果たす。こちらは種類も多く複雑なため説明は後日に改めるがどちらもMPに依存しないスタイルを確立したジョブで万が一、ユーノを見逃してアースラが訪れても魔力感知はされないよう頭をひねった結果でもある。もつとも、FFXIにおいてレベルがカウントストップの状態に

なった時に得られるボーナスを割り振っているため多少のMPはあるが装備で打消し、ほとんどない状態にすることに成功している。

しかしながら、なぜ、こんな説明を長々とやっているかと言えば、現在進行形で謎の物体に追いかけているからとしか言えない。

魔力もない、気配も消しているにもかかわらず、部活帰りでコンビニによって寮へ戻ろうとした矢先、目の前にこいつはいらっしゃった。

「グルアアアッアアアアアア！」

「おい
い
い
い
い
い
い
い
い
い
!?
」

なに、こいつ、トリガーNM的なモンスターじゃないの！？てか、
ジュエルシードだろ！？おとなしく淫獣おそつてろよ！

などと心中で叫ぶがそんなもの、虚しいだけである。

モーグリ！装備変更、忍者のC-5を頼む！

くぽっ！?ちよつと待つくぽっ

耳に付けたパールの付いたイヤリングに叫んだ俺は決して怪しい精神構造を持つ人間ではなく、これが家にいるモーグリと連絡をやりあうための手段なのだ。

装備やアイテムの殆どは持ち運びの利くものではないため、モーターに相談したところこのイヤリング、（LS リンクシウル）を介してモーターに連絡すれば装備変更が可能と教えられていただけに過ぎない。

いや、でもさ、いきなり体が光に包まれて気が付けば忍び装束になっっているのは良いんだけど…名実ともに不審者だよな、これ…。

民家を避け公園に逃げ込むと向き直り、忍刀を手にする。

ハイエンドコンテンツを攻略し、虐めの様なDSをこなすことで手にできる最後の最後まで愛用し続けたエンピリアン装束とよばれる装備品に身を包み、地面に足を突き立て加速していた体を滑らせながら追いかけてきたモンスターと対峙する。

空中から落ちてきた物体は地面と衝突すると石つぶてを巻き込んであたりにまき散らす、これ自体に対し威力がないのか装備が優

れているからなのかは分からないがダメージとなることはない。

忍刀・真神無と忍刀・天人鳥を構え、状況の把握に務める。

ここで、これを討伐するのは可能か？

なのはが現れた場合の接触はどうするか？

いま、退治していることがどこまでイレギュラーなのか？

また、この状況が今後、フォロー可能なものかそれとも巻き込まれる概算が高くなるのか？

それが分からない、故に手が詰まる。

しかし、相手はそんなことを察してくれるわけもない。

『グルオオオオオ』

手を出してこないこちらを弱腰ととったか、塊が獣のような雄たけびをあげ突進してくるのをバックステップだけで避けると、勢いを殺しきれなかった塊が木々へとぶつかるがダメージらしいダメージは入っていないように見える。

分類にするならゴースト系か？物理攻撃はあまり聞かなさそうだな――

伊達にゲームを長々としていたわけでも気が狂いそうな痛みと経験を積んだわけではない、戦闘用に頭を切り替え冷えた頭で敵を滅することに集中する。

「空蟬の術 壱」

その言葉を口にする、手にした人型の紙を翳し放り投げるとぼんやりとした影が体にまとわりつくのがわかる。

忍者の非常識なまでの回避成功を一助した魔法…いや、忍術、空蟬の術は体に幻影をまわりつかせ攻撃が当たるのと同時に幻影が身代わりとなるモノで広範囲なものでもないかぎりは絶対の回避性能を誇る。

これこそが忍者を選んでいる理由だった。

「伊賀上忍、百地丹波…いざ、参る」

腰だめに構え、引き絞った足を全力で踏み出し、一足で塊の足元にたどり着くと二の足で飛び上がり目玉と思しき部分に刃を突き立

てると塊が苦悶の声を上げる。

「暗闇の術 式」

触媒を手にし念を込めると闇色に染まった煙が獣の周りを覆い隠し視界を遮るように幕を張る。

膜が張りきつたのを確認すると腰を落とし足元を切りつけるとそのまま、足払いをかけ傾いた体に返す刃を突き立て切り裂き蹴り飛ばす。

ゲームでは同一動作にしか見えなかったその動きは、知識の中で目まぐるしく動く戦況を判断し体を動かしていた。

文字通りの経験は彼の地となり肉となつて生きていたのだ。

塊から出される触手を片手で弾いて受け流し、もう片方で触手を根元から断ち切ると懷に潜り込み二回、三回と連撃をたたき込む。

「火遁：参」

触手をあらかた切り終えると懷から忍具を取出しそのまま、その取り出した腕ごとモンスターの口の中に突っ込み、モンスターが腕ごと噛み切ろうとした瞬間、忍具が爆ぜた。

ガスに引火するように燃え広がる火炎はモンスターと言う塊を飲み込み、貪欲に食らい尽していき動きを鈍らせたモンスターが、最後に見たのは漆黒に輝く忍刀が己の目に突き刺さる瞬間だった。

「臨……」

飽和攻撃を受けたモンスターは、魔力と言う己の肉体の維持限界を超え霧散させ雪が風に散らされるが如く消えていく。

残ったのは源凶たるジュエルシードただ一つのみ。

静かに彼は腕を組んで考えた。

倒してしまった――

いや、どうしよう？判断基準のつもりで戦ったらあっさり勝てました。

カンスト（カウンターストップ）してるレベル100の忍者なんだから当然茶当然なんだけど、これ、いくつか集まると世界滅ぼせるぐらいの出力あるんだよね？

向こうでそんな無茶ぶりしてくる敵なんて、そりゃいたが、こんなに弱いはずがない。

ベひんもす様もといベヒーモスやアダマンタスのほうがよほど強敵だ。

ため息一つもらすとジュエルシードを手取るべく手を伸ばした瞬間、公園に結界が張られ、閉じ込められたのを察知するとその場から、飛びのき素早く身を隠す。

「物見の術…遁甲の術！」

手元から札を二枚取出し、音と姿を隠すのではなく消す。

熱源探知などをするものでもない限りばれることはない。

それでも木の上に身を置き、しばらく様子を伺うと動きがあった。なのはとユーノが姿を現したのだ。

まだ、なのはは魔王として覚醒していないのかユーノがレイジングハートを持っており喋っている様子はない。

「あつた、あれだ！」

ジュエルシードを見つけたユーノが叫ぶようにして声を上げるとなのはが目を丸くして見せた。

「ほ、本当にしゃべれるんだね」

本格的な邂逅はまだ済ませていなかったらしい、と、信志が思いながらも眺めているとさらに動きが出た。

ジュエルシードが再び動き始めたのだ。

霧散させてから時間を置きすぎたのが原因なのか、元々活性化しているため何度でも復活するのかは分らないが、再び塊のような体を手にしたモンスターが月に向かって吠えたとなのはたちを見据え、警戒するようにじりじりと動き出した。

闇に舞う。（後書き）

いつもの説明コーナー

ナイト・・・防御力が高く、所謂うけとめる盾、FFXIでは忍者が盾として定着するまでは必ずと言っていいほど科のジョブが組み込まれた。回復魔法に一部の強化や攻撃魔法を習得する。ブロントさまがあまりにも有名すぎる。

忍者・・・防御は一般的だが回避が高く、よける盾としてユーザーの知恵から生み出された驚異の盾キャラ。

空蟬の術 分身を生み出し攻撃を必ず数回、回避する。だが、弱点も存在し範囲攻撃などではすべてはがれたり複数埋消費したりするなどのデメリットも存在する。

ほかの忍術はそのままですw

ちなみに『臨』はウエポンスキルと呼ばれるもので攻撃を当てた時にテクニカルポイントがたまりある一定程度ためると必殺技のように放つことができ一番最初に覚える技です。

装備品で出ていた真神無はたいへんマゾい工程を経て手に入る武器の進化形態で、もう一つのほうも同様です

内面の葛藤なんて誰しもが抱くものだ（前書き）

今回は鬱話…に分類されるんですね？

なのは魔法少女になる経緯とジュエルシードの戦いまでを2話に渡ってお伝えします。

アクが強いので嫌な人はUターン推奨です。

パートでいうとなのはの葛藤…でしょうか？
不安とごちゃまぜ、

内面の葛藤なんて誰しもが抱くものだ

タスケテ――

誰か、助けテ――

誰力、聞こエマセンか――

ノイズの様な音を聞いて私は目を覚ましました。

男の子が不思議な塊と戦っている夢、時計を見ると針は6時30分を指しているのに気が付いて私は飛び起きた。

髪を部屋の備え付けの鏡で梳かすいつもの髪形に整える。

桃子さんが何度か髪形を変えたら？と聞いてきたがあの人が褒めてくれた髪形を直す気はない。

以来、桃子さんに髪を梳かしてもらうのを止め、自分でやるようにした。

自分で出来たほうが、桃子さんの手を煩わせないですむからだ。パジャマのまま、台所に降りると朝食の準備を始める。

あの時、あの人が『おいしい』と言ってくれてから料理をずっと勉強してきた。

刃物を使うのにいい顔をしなかった土郎さんだったけど最近、手も切らないし手馴れてきたら何も言わなくなった。

あの人が練習試合や冷蔵庫に余裕があるときだけ、あの人にお弁当を作ってもっていく。

それが何よりの楽しみで、困った顔をしながらもちゃんと食べて感想やアドバイスを聞くと事細かに答えてくれる時間は私にとっての何よりの楽しみだ。

みんなの分のご飯を作ると冷蔵庫の在庫を確認するが残念ながらあの人にお弁当を作る余裕はなく、最近、冷蔵庫に余裕のあることのほうが減っていて少々残念だけど、我が儘は言っではいけない。我が儘を言うとなの人たちは困った顔をする。

あの人みたいに何をしてくれる訳でもなく、ただ、やめるように

言われる。

イイコダカラガマンシテネ――

そうやって、みんなは私にとって魔法の言葉を使う。

その言葉を使われると、私は人形にならないといけない、じゃないと、話も何もしてもらえなくなるから、一人はとてもさみしいから。

お弁当を作り終えるころ、桃子さんは翠屋から、ほかのみんなは道場からリビングに集まり朝食を食べはじめ。

時間にして7時30分ころだ。

私は一足先にご飯を食べ始めている。

「おはよう、なのは、いつもごめんね」

「うっん、気にしないで桃子さん」

最初は私が作ると、桃子さんは言っていたがいつからかこの状況が当たり前になった。

「おはよう、なのは……うっん、私が作ればよかったんだけどなあ」

「美由希さん、おはよう、無理に作らないで私に任せてね？」

「そうだな、お前が作ると食べるものも食えない。……が、つらいならいいんだぞなのは？」

「自分で作りたいから作ってるんだから、気にしないで恭也さん」
ひどいよ」と掛け合いをしながらリビングに入ってくる二人を迎える。

美由希さんは味覚やセンスが壊滅的で、恭也さんは何を思ったのか武道にのめり込んでいるらしく、つらいなら、と言うのもの基本的にあまり、台所に立とうとはしない。

翠屋の厨房ならたつのに不思議だけど、言っても二人を困らせるだけだからそんなことは口にしない。

「おはよう、なのは。娘の美味しい朝食を食べられるなんて幸せだなあ」

「おはよう、士郎さん。お変わりあるからたくさん食べてね」

どうやら、私の料理を食べて幸せになってくれる士郎さんが最後

に入ってきて朝食が始まる。

あら、あなた口にお弁当が——美由希、リボンが曲がってる——
——すまないな、桃子——え、どこどこ？恭ちゃん、なおしてく
れる？——もう、貴女ったら、子供たちが見てますよ——たく、
おまえはてのかかる——

二組がお互いに我が儘を言っても苦笑いをしながら受け入れてく
れるこの状況で、私も行ったら受け入れてもらえるのだろうかと、
何度思っただろう？

何度か、口にしたことがある。

僅かなりの希望を持って、でも、みんなは苦笑いをするだけで、
指摘するだけでしてくれなかった。

私は、この『家族』の輪において浮いている…。

「ごちそうさま」

静かに、そう言って食器を下げる。

みんなは、私の一言に適当な一言をかけると、二人の時間に戻っ
ていく。

私はいなくても、きっと変わらないのだろう。

部屋に戻ると窓に飾ってある小瓶を抱きしめ、そつと元の位置に
戻すと銀で出来た小さな髪飾りの付いた帽子をかぶり、瓶に向かっ
て一言だけ呟いて家を出掛けた。

行ってきます、お兄ちゃん——

たまに、あの人は家に帰ってきて掃除をして次の日は歩いて学校
に行く。

そんなときは家に明かりがついているので、無理をしてでもお弁
当を作ったあの人と学校へ行くんだけど残念ながら帰ってきてはい
ないのを確認している。

小さくため息をこぼすとバスに乗り込み、親友の二人と顔を合わ
せ挨拶をする。

「おはよう、なのはちゃん」

静かに微笑みながら挨拶をしてくれるのはすずかちゃん、月村す

ずかちゃんだ。

紫がかった髪に透明感のある日本人らしい肌色、大和撫子と言う言葉がよく似合うであろう女の子で

「おはよ、なのは…その分だと、愛しの彼にまた会えなかったみたいね」

少しからかうような言い方をするのはアリサちゃん、アリサ・バニングスと言うダブルの女の子だ。ヒマワリのような金色の紙に白人特有の白さが際立ち、ビスクドールの様な完成したかわいらしさを持つ女の子。

「おはよう、二人とも…でも、アリサちゃん行き成り意地悪だよ」

「そうだよ、アリサちゃん。二人で応援するって決めたでしょ？」

「ごめんね、なのは…でも今度試合行くんでしょ？ 鮫島に言って車を出してもらうから許して、ね？」

「も、また、アリサちゃんそうやってごまかす」

「あははは、ごめんてば」

「うふふふ」

とりとめない会話、物凄くほつとしてここに居ていいんだと実感する。

でも、私は二人に釣り合っているのだろうか？

二人は私に三人でいるからちようどいい。と言ってくれる。

不安になる私を支えてくれる。

だから、という訳じゃないけど、だから、安心して二人といれる。願わくば、あの人と三人、一緒に入れることを心から願いながら、私はバスに揺られていった。

「将来の希望ってなに？」

お弁当の時間にアリサちゃんはそう切り出した。

先ほどの社会の授業で気になったのだろう

「私は当然、両親の会社を受け継ぐことよ！」

宣言するアリサちゃんがまぶしく感じた。

いずれは、親の手伝いをはじめ小さな分野でいいので任してもらい、そこで自分の力をふるいたい。

私は何をしたいんだろう？

私はもう、両親に何かしたいと思わない、しいて言えば、態々、私立に通わせてもらった感謝はしないといけない。

「私は、工学系の勉強をしたいかなあ？」

すずかちゃんは、お姉さんにあこがれている。別に変な意味じゃなくて、明るくてはきはきしていつも笑ってる。

昔はそんなに、感情を表に出すような感じじゃなかったらしいんだけど、それでも一生懸命、すずかちゃんを気遣って育てくれたことに感謝しているらしい。

恭也さんとすずかちゃんのお姉さんが仲がいいので何度かあったことがある。

そんな二人がとも、私はうらやましい。

きっと、すごく贅沢なんだろうって思う。

けど、私の親は心配してくれていたけど、心配してくれるだけだった。

話をしてくれるけど、聞いてくれなかった。

私を観てくれるけど、見てくれなかった。

「なのははどのなのよ？」

いつまでも口を開かない私にアリサちゃんがきいてきた。

そう、私は――

「なになにしたいんだろう」

自分で作ったお弁当を突きながら、小さくつぶやいた。

「なのは？」

「大丈夫？」

二人が怪訝な顔をしながら心配して聞いてくれる。

そう、私は、何がしたいのかわかってないんだ――

「て、てつきり、あんたのことだからお兄さんのお嫁さんとかだと思っただけど？」

アリサちゃんが慌てた様にまくしたてるのを聞いて確かにとうなずいたすずかちゃんが続いた。

「そうだよな？ 私もそう思った」

確かに、それは私の希望。

あの状況から手を差し出してくれたあの人と一緒ならどんなに幸せだろうと思う。

でも、
だ。

「きつと、お兄さんはそんな風私を見てくれない」

美由希さんはもう、胸が膨らんで女性として成長している。

おつきい、小さいを別にしたってなのはと比べれば差は一目瞭然中には私たちみたいな年代が好きでしょうがない人がテレビに出てるけどそれはとてもいけない事なのは、私でもわかる。

なにより、怖いのだ。

「もし、私がおつきくなる前に好きな人ができたらきつとその人と一緒になっちゃう」

それはある意味、当然なんだ。

私だって、お兄さんと一緒にいることを夢に見ない訳じゃない。

けど、お兄さんはもう17歳、私は9歳と言う年齢の差もある。

あの人は私が子供だから見てくれる。

私が大人になったら、もう見てくれないかもしれない、私が私である限り大人になてなれないんだから、だから、私は将来——

魔王、御生誕…。（前書き）

パソ子さん謎の大破…。なんで？
とりあえず、書き直し分投稿です。

魔王、御生誕…。

そんなことない！

アリサが叫ぼうとして叫べなかった。

なぜなら、なのはが目に涙を浮かべていたからに他ならない。

聡い彼女はなのはがどういった結論に至ったかを瞬時に理解する。確かに、なのはが達した結論が間違っている訳ではなく、むしろ可能性としては一番高いものであることに違いはないのだ。

タカが年齢の差と馬鹿にすることなかれ、少なくとも今の時代では提体が悪い。

彼が18になったとしても、なのはやアリサは10歳だ。

仮に女性の結婚可能年齢16歳になったとしても彼は24歳となる。うまく恋愛から結婚と持って行けたとしても彼女の年齢は彼の枷となる可能性が高く、彼女がそれを良しとする訳がない。

彼女の性格をアリサは好いているし、すずかも同様だ。

できるなら彼女の力になりたいし、協力を惜しむつもりもない。

が、どうにもできない問題も同時に存在している。

それが、時間だ。

これが社会人としてであつたなら問題はなかっただろう。しかし、彼と彼女が出会ったのは今よりさらに前、よしんば彼が「彼女」を作らなければ芽はあるかもしれないが、そんなものに期待できるわけがない。

まだ、付き合っているという話を聞いていない、彼は野球や勉強に夢中のようにだがいつまで続くとも限らない。

「なのはちゃん」

アリサが思考のループに嵌っていると隣にいたすずかが立ち上がり、なのはに声をかけるとそっと抱きしめた。

「お兄さんはそんなにふらふら行っちゃう人なの？」

「そんなことない！」

すずかの問いになのはは顔を上げて、強い口調で否定すると鈴鹿が安心したように笑った。

「なら、大丈夫だよ？早く大きくなってなのはちゃんに夢中になってもらおう？」

「私に…？」

「うんっ！」

すずかの言葉を理解できないと言わんばかりに問い返したなのはにすずかが満面の意味で答えた。

「だって、なのはちゃんはこんなに可愛いんだよ？だから、早くおつきくなってお兄さんが無視できない位美人になってお兄さんを振り向かせよ？」

「そうよ！だいたい、あんた、あの人にお弁当作ったり応援してるじゃない！思わず手が出ちゃうくらい可愛くなればいいのよ！」

すずかの言葉に後押しされるようにアリサがなのはを元気づけ、だいたいね、と言葉が続ける。

「うちのパパとママだって似たようなものよ？パパにママが猛アタックしたんだから」

最も、それはある程度の年齢になってからの話だったがそれは伏せる。

せつかく、立ち直ってきたなのはの勢いに水をかけるつもりなど、彼女たちにはない。

「大丈夫なのかな？」

恐る恐る、といった風になのははふたりに聞くと、大きく頷くと異口同音に答えた。

「当たり前！」

実際に彼女に目がない訳ではない。

原作主人公と言うだけあり抜群の容姿に加え、家事を積極的に行ってきた経験値から料理もそこの家事に慣れない新妻よりよほど上手く、彼の好みもよく理解している。

主人公…と、言うよりも『管理局』や『非日常』を引き連れさえ

しなければ、彼女が選ばれる目は確かにあるのだ。

そう、引き連れさえしなければ…の話ではあるが。

更に言えば、信志は彼女を欲しがっているものの結婚相手を探している訳ではない。

そのまま結婚、となるのが理想とは思っているものの理想像を負いがちな年代に結婚をするつもりなど、彼に毛頭ない。

これは彼の前世の経験でもあるが、10代で結婚と言うのはほとんど金銭的に恵まれた状況でもない限り、生活に制限がかかる。

たしかに彼はある程度、スキルを使って稼ぐことは出来るが需要以上にスキルを使うことに危惧感を抱いており、本格的に将来を決めるまではスキルの乱用を自粛していた。

そんな中、ついに物語が物語として動き出した。

<だ■力、□IOすケテ>

「え？」

ふいになのはが聴こえた声に足を止めると一緒に歩いていた二人が足止めて振り返った。

「いま、何か聞こえなかった？」

二人になのはは聞くが、二人は首をひねるばかりで聴こえた様子はない。

<僕ノ声が、聞こえマスすか？>

ノイズがかっているがはっきりと聞こえた声になのはは弾かれた様に走りだすのにふたりは一瞬、呆氣にとられるものの、すぐになのはを追いかける。

「ああ、もっつ！どうしたのよ！」

「二人とも待つてよ〜！」

なのは行き成りの行動に困惑し訳が分からないと走り出すアリサとそんな二人においてかれまいと追いかけるすずかは、さほどかからずしてなのはに追いつき、しゃがんでいる場所に何かいることに気が付いた。

「フェレット…？」

「かな？怪我してるみたいだけど」

「うん、こんなところでどうしたんだろう？」

アリサがボロボロの物体が動物：自分の知る知識の中でフェレットであることに気が付いて名称を出してみるとすずかも同じ種類に思い至ったらしく、フェレットの状態を気にしている。

先についていたなのはがそつと抱きかかえ上げると、僅かに目を開いたフェレットがなのはの手をなめると再び、気を失い倒れた。

「び、病院つてどこだっけ？」

「ええと、あっちにあったとおもうよ」

「行きましよう、流石にほつとくのは寝覚めが悪いわ」

3人がワタワタとしながら病院に行くと大したことはない旨が説明され、アリサが鯨島を呼び出し料金を払おうとするもやんわりと断られている中、ゲージの前で会議が行われていた。

目を覚ましたフェレットがあたりを見渡している。

元氣そうなのはなり寄りと言んだのもつかの間、3人は深刻な表情で頭を悩ませていた。

即ち――

「うちじゃ、流石に飼えないわ、犬に食べられちゃうかもしれないし」

「私も難しいかな、アリサちゃんじゃないけど猫がいるから」

「わたしも飲食店だから桃子さんに迷惑かけられないし」

犬猫が大量にいる家にフェレットを放つのは、このフェレットの精神衛生はもとより生命の危機にさらされかねない、なのははなの

はで家が飲食店である以上、動物はご法度である。

決定意見が出ないため、一旦、病院で預かってもらい後日、学校で飼ってくれそうな人を探すという方向で落ち着くと解散の流れになりそれぞれは帰宅する。

なのはは夕食もそこに切り上げるとフェレットの買い方をパソコンを使って調べる。

人に勧める以上、何も知らないで進めるわけにはいかない。と言うのが彼女の言葉である。

下調べも一段落したころ、また、声が聴こえた。

< 誰か、助けて >

聞き間違えではない。

今回ははっきり聴こえた。

誰かが助けを求めている。

何度も何度も、助けを求めている。

なんて、うらやましいんだろう。

助けを求めることのできる声の主が、羨ましかった。

なんで、助けを求めることができるんだろう？

誰も――

助けてくれないかもしれないのに――

嫌われるかもしれないのに――

恨まれるかもしれないのに――

きつと、声の主はそれでも希望を持っていられる人なんだろう、

それが、何よりも羨ましかった。

ただ、外の様子を見てなのははため息をついた。

やっぱり、誰もいない。

声の主も見捨てられたんだ。

だって、こんなに聴こえる声なのに、誰も動いていない、まるで聴こえないみたいに。

ああ、でも、あの人なら来てくれているのかもしれない。

だって、あの人は私も助けてくれた、なら、あの人に来てくれて

いるかもしれない。

なら、行ってみようかな？

これは、悪い子がすること、お巡りさんにつかまったらきつと、士郎さんも桃子さんも困るし、怒るだろう。

でも、良いと思った。

なにか、すごく疲れた気がする。

最近、『疲れた』と思うことが多くなってきた。

緩慢な動作で靴を履くと、置き書きにコンビ二に行くと言つ旨を書き残し家を出るとゆっくりと歩きだした。

何時からだろう？この『疲れた』と言う感覚に気が付いたのは？寂しいと思つていた筈がいつの間にか疲れたに変わっていた。てくてくとまだ聞こえる声の聞こえる方向へ、考えながら歩く。

ああ、そうだ――

私が人形にされる言葉を言われた後に感じるんだ――

どうすればいいんだろう？悩みながらもふと思う、その分、楽にしてくれる人がいる。

あの人に会えればきつと楽になる。

だから、あの人がいるかもしれない声のする先へ行ってみよう。でも、いたのは怪我のしたフェレット。

<きて、くれたの？>

フェレットがなのはをじつと見つめるのを頷くことで肯定すると、フェレットは慌てたように身を正し器用に頭を下げた。

<ありがとう！ あなたには才能がある。僕にその才能を…力を貸してください！>

このフェレットが必死になのはわかる。

けど、私はそんな力を求めているはない、欲しいのは…。

欲しいのは、何？

私は、ナニガホシイノ？

<大丈夫ですか！？>

行き成り、なのはの頭にフェレットの声が響き正気に引き戻され

小さく頷く。

<さつき、通りがかりの人が襲われて向こうへ、公園へ逃げていきました。だから、お願いです、力を…力を貸してください！>

誰、か、が襲われた？

「誰？どんな人？」

思わずフェレットを抱きかかえ上げ、問い詰めてしまう。

<こ、こんな人です！レイジングハート、お願い>

慌てた声でフェレットが胸もとの宝石に話しかけると宝石が輝き、映像を投影しだすとなのはは今度はフェレットを手から落としてしまった。

「お、にい、さん？」

映像で襲われている人物は紛れもなく信志で、塊が繰り出す一撃をすれすれでさけるとコンクリートが碎け飛び散り、信志は先ほどの一撃で生まれた手にした礫を投げ一瞬、ひるんだのを確認するやいなや走り出した。

「貸して」

<え？>

映像では軽い身のこなしで屋根へと掛け上げると公園へ走り去る信志とそれを追撃し、体の一部を放つ化け物が移し続けられていた。「貸して、早く！」

<は、はい！このレイジングハートを握って認証のキーワードを…わっ>

我慢できずになのはが叫ぶとフェレットは慌ててレイジングハートを差し出そうとするが、その動作さえもどかしくフェレットごと宝石を抱えると叫んだ。

「力を貸して、早く！護るの！絶対に、失いたくないの！」

【stand by ready・set up・】

宝石は、少女の叫びに答えるように、彼女の内なる力を形にしていく。

ここに、魔導師が産声を放ち、桃色の濁流が柱となって誕生の喜

びを表した。

魔王、御生誕…。（後書き）

と、言う訳でなぜ、なのはが先にジュエルシードモンスターと会わなかったかがここで明らかになりました。
次回、ついになのはの初戦闘になります。

12話分までのストックが…パアだorz

魔王、覚醒（前書き）

なのはの戦闘スタイルが一部変更になっています。

と、言うか中々超遠距離型が近く中距離型の戦闘スタイル変更ってどうなのだろう？

もし、御拝読の方がおられましたらば、何卒、ご感想をいただけると幸いです。

魔王、覚醒

目を開ければ、空に浮いている。

仮に、いきなりそんな状況に放り込まれて冷静に居られるだろうか？

少なくとも、現在の地球においてそのような環境に放り込まれれば、混乱するのがふつうである。

が、少女は違った。

あふれる魔力を己が力とし、意志による統轄を行い、デバイスの補助と流れ込む知識をもとに今すべきことに必要な最低限度の知識を呼び込み、必要とされる公式を一瞬で編み上げ、呆然とその状況を見上げていたフェレットを回収すると公園に向かって飛び行く。

向かう傍らで、さらに必要な知識をデバイスから吸い上げ、爆発的に増えたマルチタスクを使い順次展開していく。

その姿は、異様の一言に尽きる。

力に目覚めて間もない少女が、魔法に慣れ親しんだフェレットの指示を何一つ受けることなく、デバイスを制御下に従え必要なデータを吸い上げると、バリアジャケット、飛行魔法、空気抵抗の除去、魔力の探査、周辺地形の読み込み、生命反応の有無、などといった複数の魔法行使を同時に行っている。

彼女が来ていた服は光に解かれ弾ける頃には下にバリアジャケットの下地が形成されており、飛行魔法はその間もバージョンアップを行うことで安定性と飛行速度を飛躍的にあげていっている。

風の抵抗が強くなったかと思えば、突如として抵抗は弱まり、周りに魔力の幕が張られているのをフェレットが驚いていると抱きかえられていた腕がバリアジャケットの装甲でおおわれていく。

それは、長らく魔法に携わってきた彼にとって悪夢であり、この状況を打破する希望でもあった。

しかし、彼女の焦りの色は消えない。

「ねえ、さっきの塊の反応が消えたの… どういう事？」

公園の入り口から低空飛行で侵入し、魔力を負っていたなのはが息を乱しながらフェレットに尋ねた。

魔力の霧散したか、一時的に落ち着いたか――

フェレットはなのはの問いに答えるが、専門的な知識を持たない名の葉にとつてその問いで分かるはずもなく、フェレットはフェレットで魔力の反応が消えたことに驚くが、まずはと封時結界を張り周辺の安全を確保すると魔力が一番濃いところへと走る。

実のところ、一番混乱しているのは彼で間違いない。

一助になれば儲けものと思つて、救難信号を発したところ訪れた少女は破格の才能を宿し、既に少年の能力の外へと飛び出そうとしており、たしかに彼女の言うとおり、あれほど苦しめられたジュエルシードモンスターの反応が消失しており代わりに密度の高い魔力が周辺を覆い尽くしていた。

理解が追い付かない。それが彼の素直な感想だろう、が自分の役目を忘れた訳ではない彼は地震の役目を果たすべく魔力の一番高い地点へと足を向けるとそこに青く光る宝石が転がっているのを見て思わず叫んだ。

「あつた！ あれだ！」

「本当にしゃべれるんだね…」

今更なのはの突込みにフェレットは、自己紹介もまだだったと思ひ至るがまずは封印が先決と、なのはに頼もうとしたとき、ジュエルシードは再び輝き黒い塊を纏つて彼らの前に立ちふさがった。
「くっ、まずはあれに… えっ？」

なのはに指示を出す前に彼女はすでに動いていた。

全身、いや、関節などの部分に桃色の羽をはやしたなのはがレイジングハートの宝玉の部分から魔力刃を展開させ、アックス上に広がる光をモンスターに叩き込むと体の各所に生えた羽から魔力流を噴出させ急機動を行い、上空へと脱出する。

開いた口が広がらないとは、このことを表すのではないか？ 魔法

つまり、イメージがモノを言うことになるがそれができているということはそれだけ彼女が、それ相応の動きを見ていることなり、それだけの動きができるものがこの世界にいることを証明していた。もつとも、それが本当に可能かどうかは別の問題であるし、それが現実か否かも別となるが、それを模倣に近い形で再現し行っている現状は、現時点で己の技を磨いている多くの魔導師から見れば悪夢そのものと言っているだろう。

「消えて……」

「なくなれえええええ！」

【Divine Buster!】

「す、すごい……なんで、こんな辺境世界にこんな子が……」

Sealing Receipt Number XXI

「え？ な、なんで？」

「げないと！」

88

長椅子、池に浮かぶ船の欠片、ちぎれた電線からは小さく火花が散っている。

小さくフェレットにも汗が浮かぶ。

確かに彼なら問題視もされないかもしれないがなのは違つ。

間違いなく、何らかの関与もしくは情報を知っていると考えられ疑われるのは間違いない。

理由はどうあれ、助けに来てくれた人物が現地の司法機関に捕まるところなど見たいはずもなく大急ぎで現場から離れていくのと同じく、現場に踏み入れた影があつた。

影は周囲の状況に驚き、飛び散つた破片や穿たれた穴の様子を伺いパトカーの音が近づいてくるなか、ぴたりと動きを止め、ある場所へ素早く針を投げる。

「！？」

不意に放たれた攻撃を避けるが、攻撃されたことで不可視と消音の効果が消え闇に溶けていた信志が姿を現すと影は深く腰を落として警戒態勢を取り出方を伺つた。

「何者だ？」

影の放つ言葉は硬く、殺気さえ混じっている。

信志は何も答えず刀を取り出すと軽くステップを踏んで柄の部分で影の腹を叩くと返す刃を振りかざす。

咄嗟に影が手にした二刀を交差させ攻撃を防ぐが次の瞬間にはその場に崩れ落ちた。

「ふむ、見破り…されるとは思わなんだな、流石は魔王一族だ」

聞こえていないであろう影を見ながら呆れ交じりに呟き、その場から離れると、1、2秒をしないで影が目を覚ますが既に信志がないのを察すると僅かに肩を落とすが警察官が影のいる方向へ寄ってくるのを察し姿を消した。

影は素早く走り、家へと戻ると出迎える二人の人影があつた。

「父さん、なのはは!？」

「無事だ…が、状況が掴みきれん」

影のように動いてきた人影は家の明かりに照らされ、寄ってきた恭也に詰め寄られ厳しい表情を崩さずに答えた。

「どういう事？」

「不可解な現象が起きた…としか言えないな、戦いの気配がする場所に居るのにいない。そして、気が付けば周囲は荒れ果てている」

美由希が続きを促すがハッキリしない士郎の言葉に恭也の眉間に皺が寄る。

「父さんらしくないな…でも、そこで何かはあったんだろ？」

「ああ、戦闘痕が2種類残されていた」

「2種類?どういう事？」

状況を整理していく二人に美由紀が質問することで話を進めていく。

「一つは人の手によるものだ、踏込の跡や爆発と思しき痕跡があった。もう一つは…」

「もう一つは？」

「分からないんだ、どうやってあんなふうにやってのけたのか全く分からない」

状況を詳しく説明していく、少なくとも解析できるのは踏込や爆発物での戦闘だけで一瞬であんなに深々と地面に亀裂を入れるような方法は見当がつかず、何かの風圧を当てたような場所などもありもう一つの戦闘法が全く思いつかなかったのだ。

「なにより、相当な手練れがいる」

「なに？」

「お父さんが言うつてことは、よっぽどだよね…?」

士郎の言葉に緊張が一気に高まる。

この3人の中で最も実力が高いのは、やはり士郎であり、その為なのはが出た後に追いかける役を担った。

書置きにはコンビ二とあったが、一度も夜中で歩くことはなく勝

手に出かけることもなかったのはがいなくなったことに不安を感じた高町家の面々はそれぞれに分かれ周辺の探索へと向かい、美由紀はコンビ二、恭也は家、士郎は周辺の探索に当たっていたが異常を察し、美由紀と合流すると二人に家に残るように伝え、公園へと向かったのだ。

結果、怪しい人物…信志と遭遇し一戦を交えるも意識を奪われ逃げられると言う失態を犯した。

決して、自身に慢心をしていたつもりはなかったがどこかに油断があったと後悔しながら説明していく。

「父さんの飛針をかわして逆に一撃入れて、尚且つ気絶させるほどの相手か…」

「どんな化け物…それ」

「神速を使つてこそいない…いや、使う余裕を与えてもらえなかったと考えるべきか、いずれにせよ、思っているよりも複雑なのかもしれない…なのはにも帰ったら話を聞いてみよう」

更なる情報が必要と判断し、士郎は桃子に事の顛末をまとめて伝える為に家に入り、残された兄妹は門の前で待つこととした。

魔王、覚醒（後書き）

さて、解説コーナーとなります。

まずは、先ほど出ました不可視と消音というECS機能について、こちらはFFXIの世界でもそうなのですが見破る敵がいます。

これは視覚・聴覚感知の敵から発見されないというもので、魔法感知や生命感知、アビリティ感知などが存在しています。

さらに、こういったECS機能を使っても見破ってくる敵が一部に存在しており高町士郎は気配から敵の存在を感知したものと考えています。

続いてアビリティ『ステップ』についてです。

ステップについては多数の効果があり防御・回避をはじめとしたバツトステータス付与の効果があり、これ自体にダメージはありません。そして、ステップが成功した時にはフラリッシュと言われるボーンアストロークンを貰うことができます。

フラリッシュもステップ同様様々な支援・妨害効果があり今回、信志が使ったのはスタン効果のあるものでスタンとは短時間の一切の行動不可（気絶）を対象に与えるものです。こちらダメージは存在しませんが発生要件として相手に触れたと解釈しているため、防御したつもりの士郎はレジストをできずに気絶した。ということになります。

なお、個人的な解釈により士郎が玄関に待っていない理由と美由紀がなのはの後ろからユーノを取り上げたシーンの勝手な妄想補足にあてさせていただきました。

探しに行つてなかったわけではなく、探していてなおかつ事情を本当は説明してほしかったのではないだろうかと思ってみたり見なかったり。

尤も、こちらの小説ではなのはがすでに変質しつつあるのでどんど

んすれ違っていきますし原作のように入ったりできません。
次回はなのはサイドのほうから入り、それがおわると微妙に話がま
た飛びます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0883x/>

リリカルなのは for FFXI

2011年10月7日03時12分発行